伊勢遺跡確認調査報告書

2003.3 滋賀県守山市教育委員会

序 文

守山市は昭和40年代以降、経済の高度急成長期を通して京阪神地域のベッドタウンとして、あるいはその地勢的利点から工業団地や物流倉庫など全国に製品を供給する拠点として成長を遂げてきました。昭和45年、3万5千人で市制施行しましたが、30年を経て人口も倍増致しました。のどかな田園風景を誇った守山市も水田が宅地やマンションへと変わり、景観も大きく変化しました。

開発の一方で、発掘調査が行われ、全国的に注目を集める遺跡が次々と発見されました。特に弥生時代の水田や360基以上の方形周溝墓が発見された服部遺跡は、弥生時代像を大きく変えると伴に滋賀県における発掘調査の原点となりました。その後も大規模な環濠集落である下之郷遺跡や、大型建物が計画的に配置された伊勢遺跡、古墳時代の首長が使用した儀仗や準構造船が発見された下長遺跡など、次々と重要な遺跡が発見されました。これらの調査成果によって弥生時代から古墳時代への移行の実体が明らかとなり、守山市内には貴重な遺跡が集中することがわかってきたのです。

さて、伊勢遺跡は昭和54年に発見された弥生時代後期の集落遺跡ですが、調査初期から突然扇状地上に遺跡が形成される点や、五角形住居が見られることなどから特異な性格をもつ遺跡ではないかと考えられていました。その後、平成4年には国内最大級の掘立柱建物が発見され、他に例をみない重要な遺跡であることが判明しました。さらにその後の調査によって、次々と大型建物が見つかり紀元2世紀代の「クニ」の政治・祭祀の実体を考える上で重要な内容をもつことがわかってきたのです。守山市は、平成9年度から保存・活用を目的として、伊勢遺跡の範囲や内容を明らかにする確認調査を開始いたしました。本報告書は平成9・10年度に行った確認調査の成果をまとめたもので、範囲解明に繋がる事を願っています。確認調査にあたって伊勢・阿村町の地権者の方々の御理解・協力を受けました。また地元伊勢・阿村自治会の協力・支援がなければ本書の刊行も実現しなかったでしょう。最後になりましたが、ご協力頂いた各関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

守山市教育委員会 教育長 川端 弘

例

- 1 本書は、平成9・10年度に実施した伊勢遺跡の範囲確認調査の調査報告書である。調査は国宝重 要文化財等保存整備費補助金を得て実施した。
- 2. 本調査は、守山市伊勢町字中東浦80番地他の水田地で行った。
- 3. 本調査は、守山市教育委員会(教育長 川端 弘)が実施した。
- 4. 本発掘調査は平成10年1月7日から平成11年3月29日の期間、現地調査を実施した。なお、調査 整理業務は平成14年4月1日より平成15年3月20日まで実施した。
- 5. 発掘調査・整理調査業務にかかる教育委員会事務局は以下の体制で実施した。

平成9年度確認調査 育 長 川端 平成10年度確認調査

平成14年度整理調査

教 弘 教 育 長 川端 弘 育 長 川端 弘 教 教 育 部 長 中野 隆三 教 育 部 長 中野 隆三 教育部長山中憲三 生涯学習課長 橋井 惠子 生涯学習課長 堀尾 和子 教育次長 西田 実 生涯学習課参事 山崎 秀二 生涯学習課参事 山崎 秀二 文化財担当課長 山崎 秀二 調 査 担 当 者 伴野 幸一 調査担当者伴野幸一 調査担当者 伴野 幸一

- 7. 発掘調査・整理業務及び本報告書作成については伴野が担当した。なお、21次調査は、畑本政美 が現地調査を担当した。
- 8. 本報告書では標高は東京湾平均海面ポイントを使用し、北方位は磁北を併記している。座標は平 面直角座標第VI系に基づき、座標値は日本測地系に基づく数値である。
- 9. 本調査にかかる遺物・図面・写真資料は、市立埋蔵文化財センターに保管している。
- 10 現地調査・整理調査については以下の方々の参加を得た。

平成9・10年度

現地調查 羽橋貴子 市木尚利 小川昭平 芝田政治 北村美佐子 湯口久美子 碓井富子 小島繁一 下村良二 中井光子 橋本みさ子 中橋フジ枝

平成14年度

整理調查 福田恵子 池田由季子 中井純子

伊勢遺跡確認調查調查報告書日次

序

文

例

Ħ 次 挿 図 目 次 図版目次

第1章	確認調査	£に至る経緯と伊勢遺跡の歴史的環境······	1
	第1節	確認調査に至る経緯	1
	第2節	伊勢遺跡の歴史的環境	3
	第3節	伊勢遺跡既往調査一覧表	6
第2章	伊勢遺跡	ホの調査成果⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯⋯	10
	第1節	第21次調査の成果	10
	第2節	第46次調査の成果	16
	第3節	第48次調査の成果	20
	第4節	第49次調査の成果	25
	第5節	第50次調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	28

			144		Ħ	八		
			揺	図	Ħ	M		
	伊勢遺跡	が大型建物の構	酵成と変遷					
第4章	.,			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	46
								42
		71 > 110 41111						40
	第8節	第53次調査の)成果	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	•••••	• • • • • • • • • • • • •		38
	第7節	第52次調査σ	成果		•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	33
								32

挿図1	野洲川流域の遺跡分布図	挿図18	第50次調査出土遺物
挿図 2	伊勢遺跡全体図	挿図19	第51次調査全体図
挿図 3	第21次調査全体図	挿図20	第52次調査全体図・断面図
挿図 4	SB-1全体図	挿図21	SB-10平面図
挿図 5	第21次調査出土遺物	挿図22	第52 • 53次調查出土遺物
挿図 6	第21次調査出土遺物	挿図23	第53次調査全体図
挿図 7	第46次調査全体図	挿図24	S D - 1 断面図
挿図8	第46次調査T-2平面図及び調査位置図	挿図25	第54次調査全体図
挿図 9	第46次調查出土遺物	挿図26	大型建物出土遺物
挿図10	第48次調查平面図・断面図	挿図27	方形区画大型建物配置図
挿図11	第48次調査出土柱根	挿図28	伊勢遺跡東半部大型建物配置図
挿図12	第48次調査出土遺物		
挿図13	第49次調査全体図		
挿図14	第49次調査T-1 · 4 平面図		
挿図15	第49次調查出土遺物		
挿図16	第50次調査T-1 · 2 平面図		
挿図17	第50次調查全体図・断面図		

図 版 目 次

図版 1	伊勢遺跡21次調査	調査地全景(上)	SB-1全景(下)
図版 2	伊勢遺跡21次調査		
図版 3	伊勢遺跡21次調査		
図版 4	伊勢遺跡47次調査	SH-2全景(上)	SB-3検出状況
図版 5	伊勢遺跡48次調査	SB-5全景(上)	SB-5柱穴検出状況
図版 6	伊勢遺跡48次調査		
図版 7	伊勢遺跡48次調査		
図版 8	伊勢遺跡49次調査	調査地全景(上)	SH-1検出状況(下)
図版 9	伊勢遺跡49次調査		
図版10	伊勢遺跡50次調査		
図版11	伊勢遺跡50次調査		
図版12	伊勢遺跡51次調査	調査地全景(上)	調査地全景(北東から)下
図版13	伊勢遺跡52次調査	52•53次調査全景(上) SB-10検出状況(下)
図版14	伊勢遺跡52次調査		
図版15	伊勢遺跡52次調査		
図版16	伊勢遺跡54次調査		
図版17~25	出土遺物写真		
図版26	伊勢遺跡第48次調子	 上 柱 根	

第1章 調査に至る経過及び伊勢遺跡の歴史的環境

第1節 確認調査に至る経緯

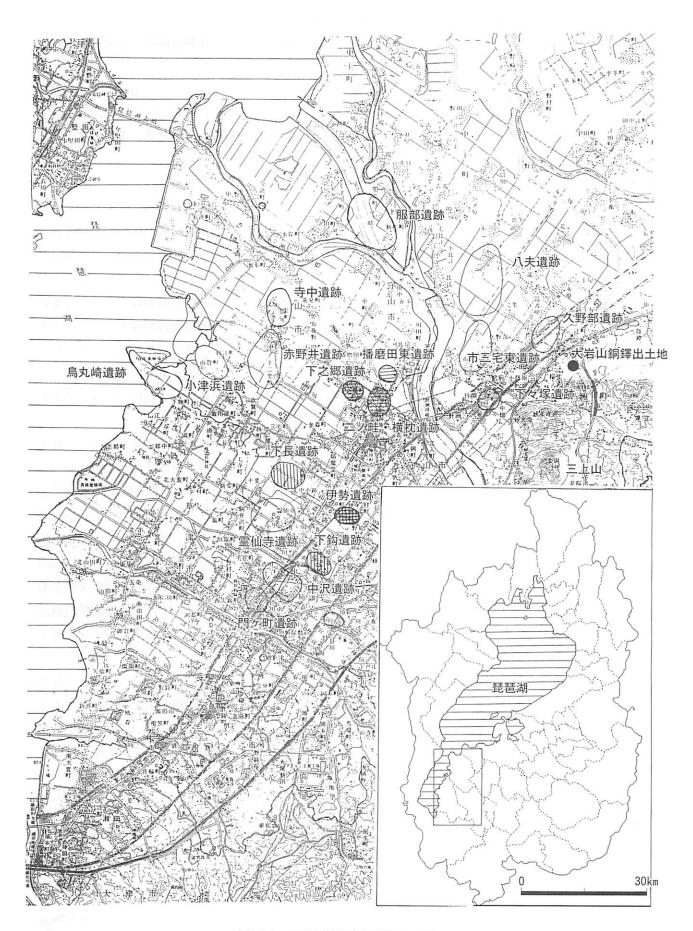
伊勢遺跡は昭和54年、個人住宅の建築に先立つ試掘調査(第1次調査)によって発見された遺跡である。翌年、宅地造成に先立ち伊勢町旧集落の東側と北側で発掘調査を行った結果(第2・3次調査)、弥生時代後期の大規模な集落遺跡であることが判明した。かつて開発の対象とはならなかった標高98m前後の扇状地上の高燥な土地に、弥生時代後期の集落遺跡が突然出現することがわかったのである。伊勢遺跡出現の特異性は発見当初より注目され、この地域における後期社会の到来を象徴する歴史事象として理解された。さらに第2・3・4次調査と早い調査段階で、五角形住居が発見され伊勢遺跡が特異な内容を持つ遺跡と考えられるようになった。その後、守山市内や湖南・湖東地域で次々と五角形住居が発見され、後期半ばから後半にかけての特徴的な住居形態として理解されるに至っている。

伊勢遺跡第4次調査で見つかった五角形住居では、床面より一括性の高い後期中葉の土器群が出土した。この住居から出土した壺や高坏の形式をみると、近畿中心部の土器様式を明確に指向するもので西ノ辻 I 地点式に併行する良好な土器群と考えられた。その後、高坏の口縁部の外反や挿入式の脚部、余り垂下しない広口壺の口縁部など、個々の形式的特徴から西ノ辻 I 地点式に後続する土器群と考えられ、後期中葉でもやや古い要素を持つ一群の土器として位置づけられるようになった。さらに注目されることは、受口状口縁甕の下腹部に貼り付け突帯をもつ形式の甕が出現することである。この五角形住居出土遺物の場合、突帯を巡らせ直接列点文を加えており、古い様相といえる。受口状口縁甕は後期半ば、下腹部に突帯を巡らせるという特徴が見られ、そのような土器を主に製作・消費する空間的範囲は旧野洲郡・栗太郡の2郡から3郡の範囲に収り、地域色再編が伊勢遺跡の出現と同時に始まることからも、後期の地域集団の再編と伊勢遺跡の出現が深く関わっていることが予想されたのである。

伊勢遺跡が極めて特殊な遺跡であることが明確になったのは平成 4 年 9 月、第21次調査で国内最大規模の掘立柱建物が発見されてからである。それに先だって平成 2 年 8 月に第18次調査が行われ、竪穴住居に切られた長楕円の土壙が 5 個検出されていた。しかし、方向や配置がランダムで性格等は不明であった。これらの土壙の南側には 1 間× 2 間の小型独立棟持柱付き建物が検出されているが、後に伊勢遺跡中心部の方形区画を構成する建物群であることが判明した。平成 4 年の21次調査でみつかった大型建物は梁行 2 間×桁行 4 間(7.8 m×11.3 m)、床面積約88㎡を測り、柱穴は長径 2 mを越える大規模なものであった。すべての柱穴は「落とし込み」と呼ぶ傾斜を持つもので、大きくて長い柱を建てあげるために掘られたものと考えられている。伊勢遺跡が保存すべき重要な遺跡と考えられるようになったのはこの21次調査からであるが、平成 6 年には18・21次調査の成果を合わせて検討した結果、伊勢遺跡の中心部に同地点があたり二重の柵列で方形に区画された中に S B - 1 から S B - (4)の建物が整然と配置されていたことが判明した。方形区画が弥生時代に存在することが判明し、地域権力及び首長の権限が強化されていたことを証明することとなった。

その後、平成6年12月には区画整理事業に先立ち実施された24次調査では、方形区画の西側約80mの地点で独立棟持柱付き大型建物が検出された。更に平成6年から7年にかけて伊勢町の東側に位置する阿村町で、道路建設及び宅地造成工事に伴う発掘調査(大洲地区第3次・第5次調査)により3棟の独立棟持柱付き大型建物が相次いで発見された。平成7年11月には野尻地区(現栗東市)でも屋内棟持柱付き大型建物が検出され、大型建物が集中的に造営された特異な遺跡であることが明確になってきたのである。

守山市では大型建物が次々と発見される伊勢遺跡の保存を目的として、国庫補助事業によって重要



挿図1 野洲川流域の遺跡分布図

遺跡範囲確認調査を平成9年度より開始し、遺跡の性格および範囲確認を進めていくことになった。 この間、JR栗東駅が平成6年に開業し、駅周辺の区画整理が完成し、伊勢遺跡内部へ開発が及んで くるようになり、開発に先立って範囲確認調査を進めていく必要があった。

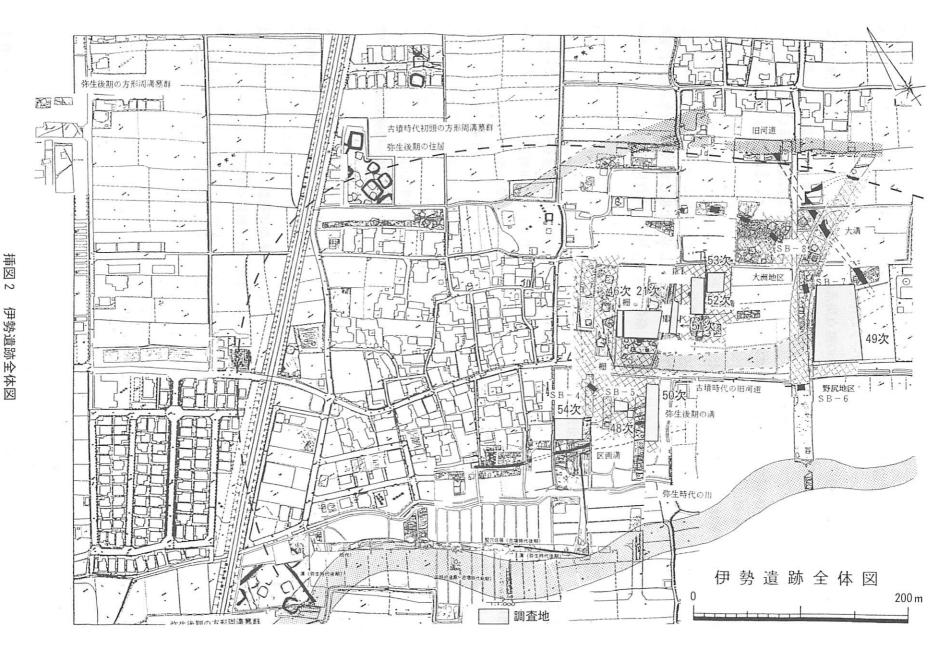
調査にあたっては地元伊勢・阿村町の地権者の了解を受け、平面検出を基本とし遺跡の広がりや性格の把握に努めた。遺構の時期決定や性格を掴む上で必要と判断される場合に限り滋賀県教育委員会文化財保護課と協議のうえ、最小限の掘削を行った。調査終了後は水田に戻すため、重機及び人力によって原状復帰に努めた。

第2節 伊勢遺跡の歴史的環境

滋賀県南部地域には、近江最大の河川である野洲川が形成した広大な沖積平野が広がっている。神体山である三上山を扇の要として扇状地が広がり、野洲川が悠々と琵琶湖に注いでいる。野洲川は今でこそ一本の河川として人工的に統御されているが、近年まで暴れ川として恐れられた川であった。野洲川の支流といわれる境川は野洲郡と栗太郡を分けた河川と考えられ、現在の景観とは異なるものであった。沖積平野には古代の中小河川が無数に埋没しており、洪水の度に流れが変わっていたことが予想されるのである。自然の脅威とも映る野洲川は、他方では広大な沖積平野を形成し水田として利用された。奈良時代の近江国は全国でも有数の稲作地帯として知られ、古代より豊かな経済基盤が開かれていたことがわかる。豊かな自然的条件に支えられ、野洲川流域には弥生時代の集落遺跡が密集している。

弥生時代前期の水田跡が発見された服部遺跡は、野洲川が形成した三角州上に展開している。縄文時代晩期から古墳時代前期にかけて継続して営まれた拠点集落である。服部遺跡では弥生時代中期全般にかけて360基以上の方形周溝墓が造営されている。弥生時代後期の洪水による消失や調査域外に広がりをみせる墓群をみると、総数では1000基近い方形周溝墓群が形成されていたのではないかと思われる。県下の大型の環濠集落に対応する墓群でも数十基という規模であり、異常な数である。弥生時代前期に水田が営まれていた良好な可耕地に惜しげもなく広大な墓域を形成したのは、近江の地域色の中枢と目される野洲川流域の集団が共有した墓域であったからであろうか。強烈な弥生文化を形成する近江の結集力を考えると、地縁や血縁で結びついた地域集団の聖地としてその帰属関係の確認の場であったのかもしれない。いずれにせよ、弥生時代前期から中期にかけて琵琶湖に近い三角州上や氾濫原の微高地上に集落が形成され、農耕が次第に定着していった様子が伺われる。

集落の動態に大きな変化が起きるのは弥生時代中期後半からである。中国地方で出現していた凹線文が瀬戸内あるいは日本海沿岸地域を通して近畿地方へ波及するようになると同時に下之郷遺跡が出現する。下之郷遺跡は扇状地末端に営まれるが、かつて開発がおよばなかった地域であり、湖岸から 6 km程内陸部に入った位置にある。3条の環濠が巡り、更にその外側に6条の弧状の濠が巡る。集落内部からは近畿・東部瀬戸内、東海地域の土器が出土しており活発な交流の拠点として機能していたことがわかる。野洲川左岸地域は後の東山道沿いにあたり、更に野洲川を遡れば伊賀・伊勢へ抜ける交通上の要衝であり、交流の拠点として重要な位置にあったと思われる。奈良時代には益須寺が造営され、官衙関連遺跡とみられる二ノ畦遺跡や川原田遺跡などがあり、墨書土器が多数出土している。歴史時代にも交通の拠点として様々な遺跡が営まれているが、その地勢的重要性は弥生時代にあっても同様であったと考えられる。下之郷遺跡の廃絶後も中期後半をとおして播磨田東遺跡や二ノ畦・横枕遺跡などの巨大環濠集落が営まれており、集落内部からは他地域の土器が搬入されていることから交流拠点として機能していたことが考えられる。中期後半における環濠集落の連鎖と交流の活発化の過程で中期末には鉄器



が流通するようになり、石器が減少する傾向がみられる。環濠集落の性格を考えるうえで、単なる防御施設ではなく流通拠点としても評価していく必要がある。中期後半における広域流通の活発化と環濠集落の継続的あるいは連鎖的発達が相関関係にあり、陸路あるいは野洲川流域の結節点にそれらが営まれていることからも、弥生中期の物流のネットワークの存在を想定することができる。

しかし、中期末から後期初頭には近畿地方の拠点集落が次々と解体し、集落の動静が不明確となる。この動きは湖南・野洲川流域にも及んでおり、二ノ畦・横枕遺跡の解体後、小規模な集落が散在する景観をこの地域にも復元することができる。しかし、酒寺遺跡では方形の環濠集落が後期前半代に営まれており、野洲川左岸地域においては環濠集落が継続的に造営されていることがわかる。しかしその規模は一辺140m程の小規模なもので、内部に20棟弱の竪穴住居が営まれるにすぎない。中期末に巨大環濠集落が解体した後、環濠の中に住む一部の人々と濠をもたない小規模な集落に住む多数の人々に分かれるのである。広域にわたる交流や交易の活発化は、それを采配し決定を下す首長の権限を強化していったと考えられ、瀬戸内や山陰、丹後など各地で首長墓が出現している。酒寺遺跡や新旭町の針江北遺跡など後期の小型環濠集落の存在は、祭祀や政事を執り行う首長層の成長を示しているのかもしれない。

後期中葉になるとこれまで集落が営まれることのなかった標高約98m~100mを測る扇状地上に伊勢遺跡が出現する。その規模は東西700m、南北450mを測り、面積30万㎡に及ぶ。遺跡の東半部には大型建物群が集中的に造営され、西半部には五角形住居を含む竪穴住居群が多数営まれている。更に、遺跡の北西部と南西部に方形周溝墓群が造営され墓域が形成されている。伊勢遺跡の出現や構成は野洲川流域の遺跡群の動態のなかでも特異であり、後期における地域社会の再編と首長層の成長を物語る遺跡と考えられる。伊勢遺跡の大型建物群の特徴は、①中心部に二重の柵で四角く囲った中に大型建物が整然と配置される。②中心部の建物群は楼観(SB-10)をはじめ柱穴配置が異なり、違った機能を有する建物群によって構成されている。③方形区画の周囲には独立棟持柱付大型建物が等間隔に、そして弧状に配置されている。等の特徴があげられる。伊勢遺跡の中心部は、それぞれ異なった機能や役割をもった建物群によって構成されていたと考えられるが、2世紀代の地域集団の政治や祭祀のありかたを考える上で重要な遺跡といえる。

伊勢遺跡の出現とともに旧境川左岸地域には下鈎遺跡、下長遺跡がほぼ同時に営まれている。これらの遺跡に共通する特徴は、①幅2~30mほどの河川沿いに発達していること。②内部に独立棟持柱付大型建物が造営されていること。③集落の周囲には環濠が巡らない事。④集落内部を溝や柵で方形に区画すること。などがあげられる。伊勢遺跡はそのなかでも大型建物群が集中する遺跡であり、政治・祭祀の中心的位置を占めていたと考えられる。下鈎遺跡では小銅鐸や銅釧、銅鏃、銅滴、銅の湯玉などが多数出土しており銅製品の製作を行なっていたと考えられる。下長遺跡では、準構造船の部材や櫂などが出土しているほか、近畿・東海・瀬戸内・北陸・山陰など弥生末から古墳時代前期にかけて各地の土器が持ち運ばれていて、琵琶湖や野洲川支流を利用した交易や物流の拠点として機能していたと考えることができる。下長遺跡の場合、古墳時代前期にまで継続し発展するが、伊勢遺跡の時代、これらの遺跡は機能分化し、中小河川を利用した船運によって結びついていたと考えられる。祭殿とみられる大型建物もしており、宗教や祭祀を共有していたと考えられ、一つの遺跡群として有機的に機能していたことが想定されるのである。

伊勢遺跡は弥生後期末に衰退し、下長遺跡は継続しより発達を遂げる。この時期、野洲町大岩山には銅鐸が埋納されている。大岩山銅鐸は近畿式と遠江で発達する三遠式銅鐸が合わせて埋納されており、弥生時代の末に銅鐸埋納儀礼に広域におよぶ集団が参加したと考えられる。近江南部地域が弥生

時代の終焉において、近畿と東海をつなぐ重要な役割を演じていたことが推測される。その後、大和に纏向遺跡が出現し古墳時代が始まるが、この動きに合わせて列島内各地の土器が大量に移動する現象が見られる。下長遺跡では中部瀬戸内や山陰・北陸・東海など各地の土器が搬入されており、東西日本の交差点として物流の中継基地として機能していたと考えられる。

伊勢遺跡の衰退と大岩山の銅鐸埋納の後に、東西日本の交流・交易が頻繁になり多数の人々の移動が行われるようになったことがわかる。伊勢遺跡の生成・発展・衰退の過程は弥生時代の終末と古墳時代の開始のプロセスを探るうえで重要な位置を占めているほか、下鈎遺跡・下長遺跡の展開は地域集団の再編成から首長層析出の過程を追うことができる遺跡群といえよう。

第3節 伊勢遺跡既往調查一覧表

伊勢遺跡は昭和54年に発見されて以来、平成14年3月末までに76次に及ぶ発掘調査を行っている。本報告では、21次調査の発掘調査の成果と46・48・49・50・51・52・53・54次の確認調査を収録している。また、大洲遺跡については平成4年に発見され、中世(鎌倉時代)を中心とする遺跡として調査が行われてきたが、平成6年度に実施した第5次調査によって伊勢遺跡に連続する弥生時代後期の集落が広がっていることが判明し、平成9年度の遺跡地図改正によって伊勢遺跡の範囲を改訂した。

大洲遺跡既往調査一覧表

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
1次	阿村町字南東下182	平成 4 年10月22日~ 平成 4 年10月23日迄	農業倉庫		乙貞65号 惹	
2次	阿村町字上大洲136-3	平成 4 年10月28日~ 平成 4 年12月28日迄	道路建設		乙貞65号 秃	土壌・竪穴住居・溝。
3次	阿村町字上大洲136-3	平成5年6月21日~ 平成5年9月30日迄	道路建設	2880 ਜੀ	乙貞70 71号	弥生後期の竪穴住居・土壙・柱穴・独立 棟持柱付建物(SB-7)・大溝。
4次	阿村町字北東下182	平成6年9月2日~ 平成6年10月14日迄	道路建設		乙貞76号	古墳時代中期の流路。 近世以降の井戸。
5次	阿村町字大洲165-1	平成6年10月~ 平成7年8月1日迄	宅地造成	1,800 ਜੰ	乙貞77 78 81 82 現説資料95.1.14 6.3 8.5	弥生後期の独立棟持柱建物2棟(SB-8・ 9) 竪穴住居11棟。平地式建物の柱穴群。
6次	阿村町字大洲138-1	平成8年5月~ 平成8年7月	宅地造成	342 m²	乙貞87号 46岁	弥生後期の大溝・竪穴住居 1 棟・土壙。
7次	阿村町字上大洲137-1	平成10年12月14日~ 平成10年12月17日迄	バレイ 教室	300 ㎡ / 785.9 ㎡	乙貞103号表	大游。

伊勢遺跡既往調査一覧表

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
1次	伊勢町字中東浦75	昭和56年1月16日~ 昭和56年1月22日迄	個人住宅	約50 ㎡	乙貞1号	試掘により弥生後期の遺跡の存在を確認。柱穴・溝(方形周溝墓か)。
2次	伊勢町字中東浦76・77・ 82-1	昭和56年4月13日~ 昭和56年7月10日迄	宅地造成 県経済連	約3,000㎡	滋賀文化財だより67号 乙貞4・5号	弥生後期の竪穴住居9様検出、内1様は五角形住居。 環の検出、鎌倉時代の第立柱建物・井戸等検出。
3次	伊勢町字大苗代309-9、 311-1	昭和56年7月10日~ 昭和56年9月30日迄	宅地造成 県経済連	約3,000㎡	乙貞5号	発生後期の堅穴住居10機検出、内1棟は五角形住居、古 物時代初頭から前期にかけての方形間溝篷8基を検出。
4次	伊勢町字大将軍 2 丁田3 44・343	昭和57年4月12日~ 昭和57年4月26日迄	農業倉庫	約400㎡/ 580㎡	守文報第12冊 乙貞 6 ・ 7	奈生後期の五角杉住居1棟、平安後期の溝・土墳・柱列・ 井戸寺を検出、五角杉住居から弥生後期の土器群が出土。
5次	伊勢町字西浦537	昭和57年 5 月	個人住宅	約100㎡	守文報第12冊	弥生後期の溝。
6次	伊勢町451-1 他二町 町30-1	昭和58年9月2日~ 昭和58年9月30日迄	宅地造成 大鳥繊維工業備	約2,000㎡	守文報第15冊	奈良時代の掘立柱建物 1 棟・ 溝を検出。
7次	伊勢町451-8 他二町 町30-1	昭和59年5月30日~ 昭和59年6月17日迄	宅地造成 大島横維工業備	約1,000㎡	守文報第15冊	奈良時代の掘立柱建物 1 棟・ 満を検出。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
0.74-	伊勢町字西浦537·538	昭和59年11月9日~	個人住宅	70 m² /	守文報第20冊	溝。
8次		昭和59年11月30日迄		174 m²	×	
9次	阿村町字下番田151-3	昭和59年4月5日	管材置き場送貿県 経済良業共同組合	約300㎡/ 476㎡		旧河道。
10次	伊勢町字二丁田327-3	昭和59年11月10日~ 昭和59年12月1日迄	個人住宅	約700㎡/ 1,269㎡	守文報第20冊	弥生後期の竪穴住居 1 棟検出。奈良・平安時 代の掘建柱建物・溝、鎌倉時代の建物・井戸
11次	伊勢町字西浦540	昭和59年12月10日~ 昭和59年12月14日迄	個人住宅	200 m²	守文報第26冊	溝(しがらみ遺構)。
12次	伊勢町字伊勢里177-1	昭和63年12月19日~ 昭和63年12月26日迄	段業倉庫	405 m²	守文報第33冊	游4条、土城6基、柱穴、中世とみられる。
13次	伊勢町字大苗代303-12	平成元年1月13日~ 平成元年2月8日迄	個人住宅	300 ਜਾਂ	守文報第33冊 乙貞43号	古墳時代初頭の方形周溝墓2基、 溝・柱穴 奈良時代(8世紀前半)
14次	伊勢町字上阿ノ図19- 1 外4年	平成元年 4 月20日~ 平成元年 6 月 4 日迄	宅地造成	2,000 ㎡ / 12,464 ㎡	乙貞51号	古墳時代・鎌倉時代の游、奈良 時代の溝2条。江戸時代の井戸。
15次	伊勢町字伊勢里322-3	平成元年12月13日~ 平成元年12月14日迄	個人住宅	60 m² /	守文報第43冊	弥生後期から古墳後期の遺物 包含層。鎌倉時代の柱穴。
16次	伊勢町字二丁田347-1	平成2年2月4日~ 平成2年2月23日迄	個人住宅	978 m²	守文報第43冊	鎌倉時代の掘建柱建物・溝・ 土城。
17次	伊勢町二丁田	平成2年2月~ 平成2年4月迄	宅地造成	450 ㎡	乙貞55号	鎌倉時代の溝・掘建柱建物 6 棟、土壌 7 基江戸時代の井戸。
18次	伊勢町字中東浦81-1	平成 2 年 6 月28日~ 平成 2 年 8 月 8 日迄	介庫建設	888 m²	守文報第42冊 乙貞51号	弥生後期の竪穴住居9棟・海・独立検持柱 付建物。鎌倉時代の掘立柱建物・旧河道。
19次	伊勢町字井上125	平成 4 年 1 月28日~ 平成 4 年 1 月30日迄	個人住宅	330 m²	守文報第44冊 乙貞61号	弥生後期末の竪穴住居・方形周溝 墓・溝。縄文晩期の深鉢・石鏃。
20次	伊勢町字大将軍502 - 1 · 5 02 - 2 · 513 - 1 · 513 - 2	平成4年6月8日~ 平成4年6月10日迄	倉庫建設	約1,000㎡ /948㎡	乙貞63号	弥生後期の竪穴住居 l 棟 (五 角形住居か)旧河道。
21次	伊勢町字中東浦80	平成 4 年 6 月25日~ 平成 4 年 9 月25日迄	倉庫建設	870 ㎡	現説資料92.9.19 乙貞64・ 65号	弥生後期の大型建物 3 様(SB-1・2・3)竪穴住 居7 様・柱穴多数。 鎌倉時代の擬立柱建物 4 様。
22次	伊勢町字南高関459	平成 4 年 7 月29日~ 平成 4 年 9 月 5 日迄	共同住宅	600 m²	守文報第48冊 乙貞64号	弥生後期の方形周溝墓 3 基。古墳 時代後期から平安時代の溝。
23次	伊勢町字西浦553	平成4年9月1日~ 平成4年9月15日迄	個人住宅	227 m²	守文報第47冊	弥生後期の自然流路 (土器出 土)。
24次	伊勢町字滞崎411- 1 412- 1	平成 5 年 4 月23日~ 平成 5 年 6 月30日迄	共同住宅	2,279 m²	乙貞69号 守文報53冊	鎌倉時代の掘立柱建物・溝。
25次	伊勢町字大苗代308-2	平成5年5月15日~ 平成5年5月29日迄	個人住宅	500 m²	乙貞69号	弥生後期の大游。古墳時代前 期の方形周溝墓1基。
26次	伊勢町字滯崎409	平成5年6月7日~ 平成5年6月12日迄	共同住宅	1,292 ㎡ / 1,308 ㎡	乙貞69号	耕作跡。
27次	伊勢町字伊勢里323-3	平成 5 年 9 月21日~ 平成 5 年10月15日迄	共同住宅	500 ㎡ / 998 ㎡	乙貞71号	弥生後期の竪穴住居 2 棟・土 壙 6 基。
28次	伊勢町字南東浦84-1 他	平成 5 年10月26日~ 平成 7 年 5 月31日迄	区画整理	約10,000㎡	乙貞72.73.74.75号 守文報第63.77.80冊	弥生時代の大型建物・区画溝・方形周溝 墓。鎌倉時代の揺立柱建物・区画溝他。
29次	伊勢町字西浦531他	平成 5 年10月 ~ 平成 6 年 1 月 迄	公共下水	696 m²	乙貞73号表	
30次	伊勢町字高崎460	平成6年5月23日~ 平成6年5月27日迄	共同住宅 東和不動	400 m²	乙貞79表	弥生中期の方形周溝墓。
31次	伊勢町字伊勢里322	平成7年1月24日~ 平成7年2月17日迄	公共下水	200 ਜੀ	乙貞85号表	弥生後期から鎌倉。
32次	伊勢町字伊勢里257	平成7年9月15日	個人住宅	396 m²	守文報第61冊	井戸 (近世)
33次	伊勢町字大苗代302 304-7	平成7年12月20日~ 平成8年1月31日迄	共同住宅 伊藤工務	500 ㎡ / 1312.9 ㎡	乙貞84号	縄文時代の土壙・柱穴。
34次	伊勢町字伊勢里525	平成8年3月4日~ 平成8年3月22日迄	個人住宅	346 m²	乙貞85号 守文報第61冊	鎌倉時代の掘立柱建物・溝・ 土壌。

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
35次	二町町字北上代7-5	平成8年7月22日~	宅地造成	336 m² /	乙貞88号	弥生後期の方形周溝墓・竪穴
	9 - 2	平成8年8月26日迄	高森ハウス	2,094 m²		住居。
36次	伊勢町字大将軍516-1	平成8年11月13日~ 平成8年11月26日迄	個人住宅	120 ㎡ ∕ 218 ㎡	乙貞90号 守文報第61冊97年 3	弥生後期の周壁滯が巡る五角 形住居。中世の溝。
		平成8年11月13日~	共同住宅	117 m²/	乙貞90号	満3条・土壙2基・柱穴。
37次	521	平成8年11月21日迄	7(1-)11. 6	368 m²	LANG	1440 % 1204 225 11776
20.744	伊勢町字南代104	平成8年11月20日~	共同住宅	117 m² /	乙贞90号	溝 5 条・土壙 1 基。
38次		平成8年12月7日迄		316 m²		
39次	伊勢町字伊勢里	平成9年1月31日~	個人住宅	80 m² /	乙貞91号	溝3条・土壙2基・柱穴。
		平成9年2月14日迄		368 m²	守文報第66冊98年3	
40次	伊勢町字南代3街区9	平成 9 年 4 月24日~ 平成 9 年 6 月13日迄	共同住宅	323 ㎡ / 1,148 ㎡	乙貞93号	旧河道。
		平成 9 年 5 月 16日	個人住宅	25 m²	守文報第66冊 98年3	中世の土壌。
41次	1 Oroni Tilling 7	TIX 3 4 0 7 10 11	個人正七	2011	1 X FX 3 (III) 00 FX 3	・1-1日 へン Tr 2040
40:44	伊勢町字西浦548-1	平成9年6月26日	個人住宅	25 m²	守文報第66冊 98年3	古墳時代前期の溝。中世の土
42次						塘 。
43次	伊勢町字南代14街区 4	平成9年8月4日~	個人住宅	374 ㎡ ∕	乙貞94号	掘立柱建物 4 棟、中世の井戸
		平成9年8月26日迄	11 1	745 m	守文報第66冊98年 3	1基。
44次	伊勢町字南代14街区7	平成 9 年10月 8 日~ 平成 9 年11月 6 日迄	共同住宅	220 ㎡ ∕ 768 ㎡	乙貞95号	弥生堅穴住居 1 棟・独立棟持柱付大型建物(SB-4)・土墳 2 基・柱穴多数、中世の溝。
	伊勢町字伊勢里10街区	平成 9 年11月 22日~	個人住宅	433 m² /	乙貞96号	弥生溝1条。中世区画溝・掘立柱
45次	4	平成 9 年12月24日迄	III / LI L	500 m²	守文報第66冊98年3	建物 1 棟、井戸 1 基柱穴多数
1011	伊勢町字中東浦80	平成10年1月22日~	確認調查	100 m²	乙以97号	弥生後期の竪穴住居 7 棟・柱
46次		平成10年3月4日迄			今回の報告分	穴多数・土壙。
47次	伊勢町字稗田396	平成10年3月13日~	宅地造成	60 m² /	乙貞97号	溝1条、古墳時代後期柱穴1
		平成10年3月14日迄		2,200 m²	and the second s	個。
48次	伊勢町字南東浦91	平成10年 5 月21日~ 平成10年 6 月19日迄	確認調査	150 ㎡	乙貞99号 現説資料98.6.1 今回の報告分	独立棟持柱付大型建物1棟(SB-5)柱 根2出土・柱穴多数。中世の溝1条。
	阿村町字上番田143-1	平成10年 9 月16日~	工場建設	1,856 m²	今回の報告分	竪穴住居・溝。
49次		平成10年9月18日~	1.场处议	1,000111	7回の接合力	至八江小 1995
	伊勢町字南東浦92・93	平成10年10月12日~	共同住宅	800 m² /	今回の報告分	溝・土壙・柱穴。 中世の掘
50次		平成10年11月12日迄		1.246 m²		立柱建物群。
51次	伊勢町字中東浦79-1	平成10年11月211~	確認調查	500 m²	今回の報告分	弥生後期の旧河道。
01//		平成10年11月20日迄		<u> </u>	at his and a state of the state	ET de la la cate la Edita de la C
52次	阿村町156	平成10年11月20日~ 平成10年12月25日迄	確認調查	500 m²	乙貞102号	竪穴住居 5 棟・大型建物 (S B-10)・溝・柱穴。
	阿村町157-1	平成10年12月4日~	確認調查	500 m²	乙貞102号	竪穴住居 2 棟・柱穴・溝。
53次	 	平成10年12月18日迄	OF BEAUTIF	000111	今回の報告分	
	伊勢町字南代589	平成11年2月8日~	共同住宅	500 m²	乙貞130号	竪穴住居 1 棟・溝・柱穴。
54次		平成11年2月18日迄			今回の報告分	
55次	伊勢町字南代254	平成11年5月13日~	共同住宅	200 m²	乙貞109号表	旧河道。
		平成11年5月17日迄	704. 3.11 WET 4:	200 2	2 4: 10E E1	SB-1とSB-11の柱穴の切り合いを
56次	伊勢町字中東浦78	平成11年5月10日~平成11年7月8日迄	確認調查	800 m²	乙貞105号 現説資料99.7.3	確認。竪穴住居3棟・溝・柱穴多数。
	阿村町字上番田143-1	平成11年5月10日~	工場和級	2,000㎡/	乙貞106号 伊勢遺跡57次	弥生後期竪穴住居 1 棟。 古墳時代前
57次		平成11年8月25日迄		3,288.99 m²	発掘報告書01. 3	期竪穴住居 1 棟・溝 5 条・旧河道。
50:4-	阿村町155・158-1	平成11年8月2711~	確認調查	400 m²	乙貞106号	大型建物(SB-10)・竪穴
58次		平成11年9月14日迄	<u> </u>			住居の再調査。
59次	阿村町163	平成11年9月16日~	確認調查	200 ทร์		溝・竪穴住居1棟。
<u> </u>	HYLLMers	平成11年9月30日迄	ph: } 11 314 ★*	700 -3	フ占107早	竪穴住居11棟・溝3条・土
60次	阿村町155・158- 1	平成11年9月27日~ 平成11年12月14日迄	確認調查	700 m²	乙貞107号	壁八圧店11棟・蒔る泉・コ. 壙・柱穴。
-	阿村町158-1	平成12年1月4日~	里道改良	100 m²		竪穴住居3棟・溝・柱穴。
61次	E-1/1-1100 I	平成12年1月4日				

調査次数	所在地	調査期間	調査原因	面積	参考文献	調査概要
62次	伊勢町56	平成12年2月1日~ 平成12年3月21日迄	確認調査	400 m²	乙貞109号	竪穴住居1棟・焼土魂遺構・ 旧河道。
63次	伊勢町62	平成12年 2 月21日~ 平成12年 3 月21日迄	確認調査	500 m²		竪穴住居・柱穴・土壙。
64次	伊勢町56・59-1	平成12年6月26日~ 平成12年7月6日迄	確認調査	400 ਜੀ	乙貞113号	旧河道・土壌。
65次	伊勢町字南代646·647	平成12年 8 月22日~ 平成12年 8 月30日迄	共同住宅	250 ㎡	守埋文平成12年度年報	旧河道・攪乱土壙。
66次	阿村町142-1	平成12年9月11日~ 平成12年9月29日迄	確認調査	400 m²	乙貞113号	大溝1条・溝3条・土壙・柱 穴。
67次	伊勢町171-1	平成12年10月30日~ 平成12年12月9日迄	確認調查	400 ㎡	乙貞114号	竪穴住居1棟・焼土魂再調査。
68次	伊勢町284	平成12年11月21日~ 平成12年12月4日迄	確認調查	500 m²	乙貞114号	旧河道・大溝。
69次	伊勢町75	平成13年 1 月15日~ 平成13年 1 月31日迄	確認調査	200 m²		遺物包含層・溝。
70次	伊勢町字南代607	平成13年2月2日~ 平成13年2月15日迄	個人住宅	150 m²	守文報平成13年度国庫補助	旧河道。
71次	伊勢町字森ケ下426・42 7	平成13年5月23日~ 平成13年7月19日迄	宅地造成 高森ハウス	500 ㎡ / 2,701.95 ㎡	乙貞117号 現説資料01. 7. 14	古墳時代前期~奈良の掘立柱 建物7棟・溝。
72次	伊勢町259	平成13年7月2日~ 平成13年7月6日迄	共同住宅	250 m²		旧河道・溝。
73次	伊勢町613・614	平成13年 8 月20日~ 平成13年 8 月29日迄	共同住宅	250 ਜੀ		旧河道・柱穴。
74次	阿村町166-1・167	平成13年9月5日~ 平成13年12月21日迄	確認調査	800 m²	乙貞120号 現説資料01.12.17	大型竪穴住居 1 棟・棟持柱付大型建物 2 棟(SB- 9・12)竪穴住居 2 棟、柱穴・土壌多数。
75次	伊勢町字伊勢里315-1・ 316-1	平成14年1月7日~ 平成14年3月29日迄	宅地造成 (株)松屋	700 ㎡ / 2,118 ㎡	乙貞121号 現説資料02.3.30	五角形住居を含む竪穴住居 1 7棟・湖・柱穴。
76次	伊勢町字南東浦602-1	平成14年2月7日~ 平成14年2月8日迄	個人住宅	376 nf		掘立柱建物・中世の柱穴。

第2章 伊勢遺跡の調査成果

第1節 第21次調査の概要

1 調査の経緯と経過

平成4年、伊勢町字中東浦80番地の水田地(面積1,154㎡)における倉庫建築開発について打診があった。同土地は平成2年6月に倉庫建築に先立ち発掘調査を実施した第18次調査の隣接地であり、同地では多数の遺構が発見されていることから、発掘調査が必要であると回答した。市教委では協議を整え平成4年6月28日~同9月25日までの期間現地調査を行った。調査の結果、弥生時代後期の大型建物(SB-1)が検出された他、竪穴住居や多数の土壙・柱穴等を検出した。

2 検出した遺構

耕作土・床土直下の黄色シルト上面において遺構検出をおこなった。調査の結果、弥生時代後期の 大型建物・竪穴住居・土壙、古墳時代前期の土壙、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物等を 検出した。以下、主な遺構について概要を記す。

SB-1 調査区東端で弥生時代後期の大型建物SB-1を検出した。柱穴配置は2間×4間(7.8m×11.3m)で床面積88㎡を測る大型建物である。桁行の柱穴間の距離は2.8mを測り、等間隔であった。一方、梁行の柱穴間の距離はP-1からP-10、P-5からP-6はともに4.0mを測るが、P-6からP-7は3.8mと短い。 $P-10 \cdot 11$ は長径 4 mを測る細長い平面形を呈し、 2 つの柱穴が存在した。P-1からP-5とP-5からP-7は直角に柱穴が配置されているが、P11-1からP10-1の柱穴配置には約6°のズレが認められた。桁行および梁行の柱穴の形状および規模をみると、長径 2~2.7m、幅0.8m~1 mを測り何れも不整長方形を呈するものであった。断面形状は建物側に向かって傾斜をもって落ち込むもので、柱を建てあげる際の斜路と考えられる。柱穴の残存深度は1.2mから1.4mを測り極めて深いものであった。柱穴底の形状から直径50cm以上の柱材が使用されていた可能性がある。P-7~P-9 は調査区外にのびる桁柱であるが、建物北側にむかって傾斜しており南側桁柱列と同じであった。P-7はD-7はD-7はD-7はD-70に要しやや乱れが認められた。これらの柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土に多量の地山ブロックが混じっていた。

SB-2 SB-1 の西側約8 mの地点に棟方向を90°変えてSB-2 が検出された。梁行1間×桁行5間の近接棟持柱付き大型建物と想定される。梁行7 m×桁行8.1mで、床面積56.7㎡を測る。梁行間が長く平地式の建物と想定される。柱穴径は $0.35\sim0.6$ mを測る円形で、深さ $30\sim50$ cmであった。SB-1と建物軸が一致することから同時に存在した可能性が高い。

SB-3 SB-2の南側約8mの地点で楕円形の柱穴を4個検出した。 長径 $1.5\sim2.5$ mを測る規模の大きなもので、18次調査成果とあわせて1 間 \times 3間の近接棟持柱付き大型建物と推定される。梁行・桁行ともに7 mを測り、床面積49㎡を測る正方形プランの大型建物と考えられる。S B - 1 ・ 2 と比較して約6°の建物軸のブレが認められる。

SH-1 調査区西隅においてその一部を検出した。東辺は5.2mを測る。東隅及び南隅のコーナーが鈍角に開くことから五角形住居の可能性がある。残存壁高は8~12cmと浅く、埋土は茶灰色粘質土・淡茶灰色粘質土の堆積が認められた。主柱穴は各コーナーの内側2カ所において確認した。

SH-2 SH-1を切って東西4.2m、南北4.8mを測る方形プランの竪穴住居を検出した。上層より茶褐色粘土・暗茶褐色粘土・黒色粘土の堆積が認められ、残存壁高は20cmを測る。壁際には幅40~60cmを測る幅広い周壁溝が巡っていた。深さ約10~20cmを測る。床面上で4主柱穴を確認した。

SH-3 SH-2 に切られて 5×5.6 mの方形プランの竪穴住居を検出した。 埋土は茶褐色粘土の 堆積であった。 平面検出にとどめた。

調査区南西辺において4棟以上の竪穴住居が部分的に検出された。18次調査分と重なり合うもので、弥生時代後期後半から古墳時代にかけての竪穴住居群とみられる。大型建物群が廃絶したのち、この地域に竪穴住居群が進出することがわかる。

3 出土した遺物

発掘調査の過程で同調査地が重要な地点であることが判明したことから、遺跡保存のため一部の遺構を掘削するにとどめ、他は平面検出に努めた。大型建物及び竪穴住居、土壌からは弥生後期から古墳時代前期の土器が出土した。以下、遺構別に出土遺物の形式・形態の特徴を記述する。詳細については第3章の遺物観察表に記載している。

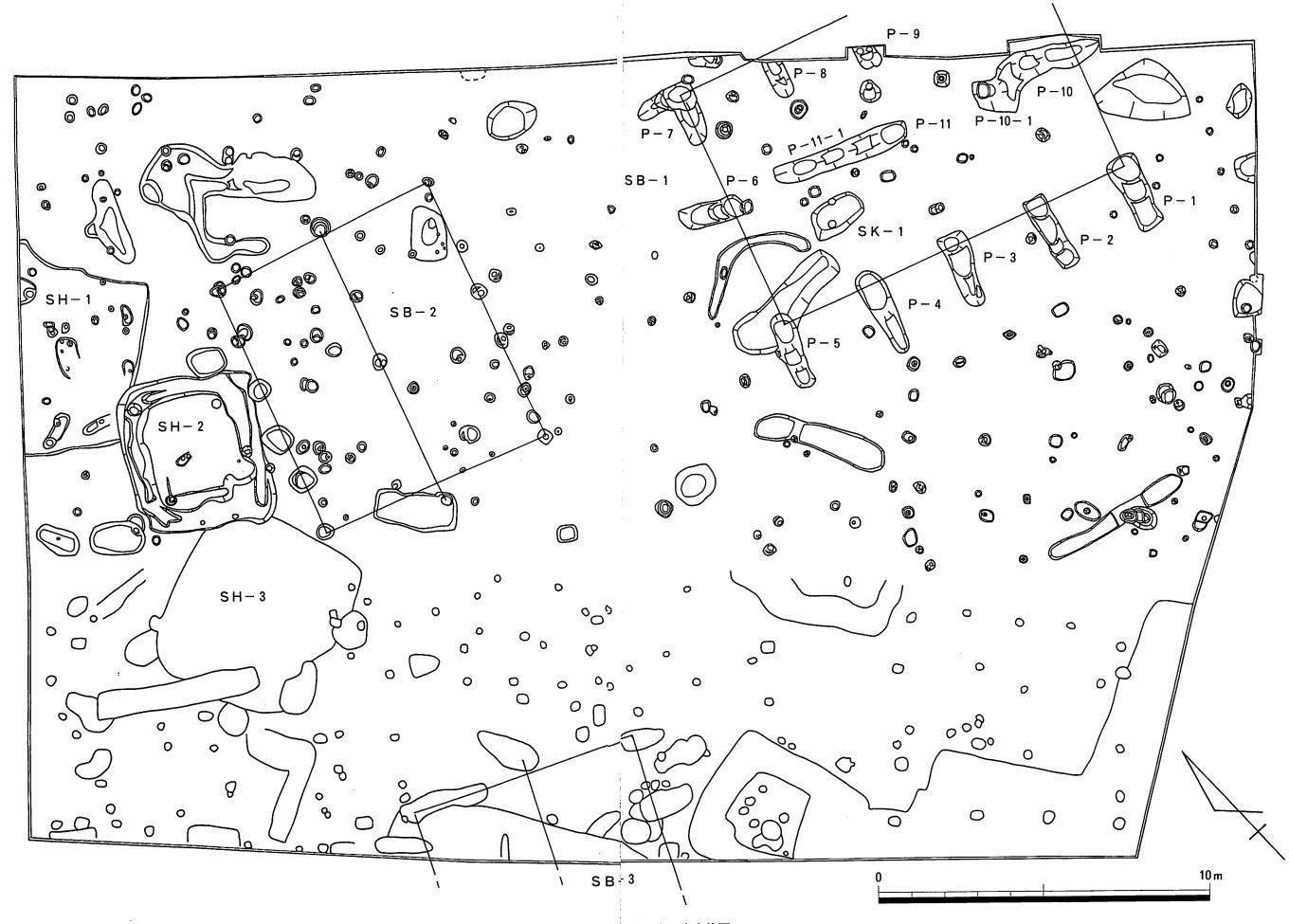
大型建物(SB-1)出土遺物

2間×4間(7.8×11.3m)を測る大型建物の各柱穴からは以下の弥生土器が出土した。

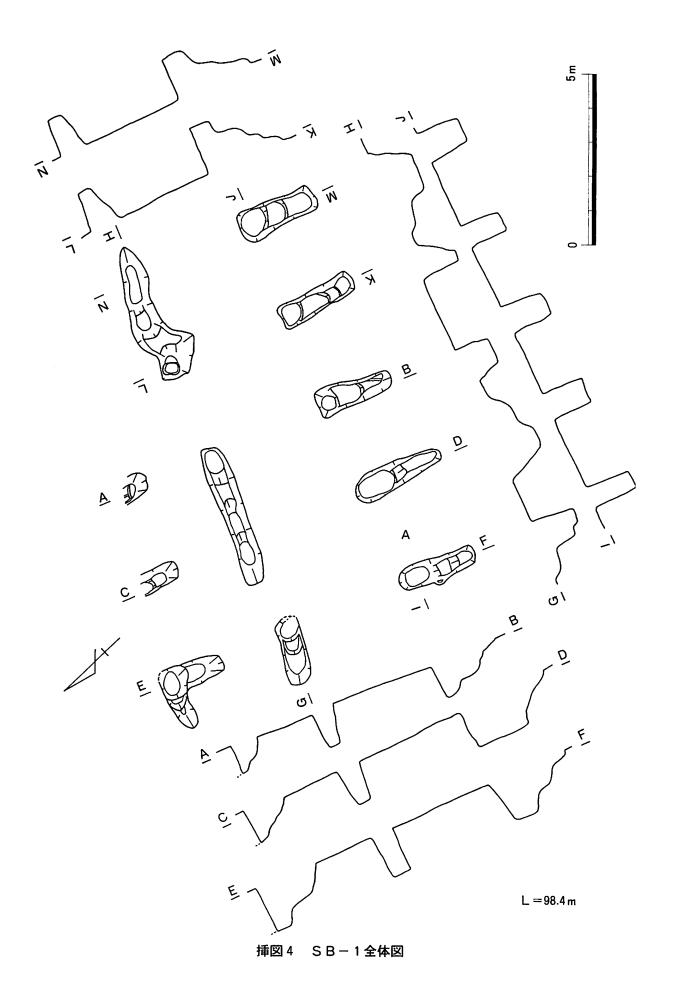
P-4 1は屈曲する高坏で、杯部との接点で明確な段を形成する。口縁部は大きく外反し端部は丸く収める。2は台付き甕の脚部とみられる。底部は円盤充填によるものではない。

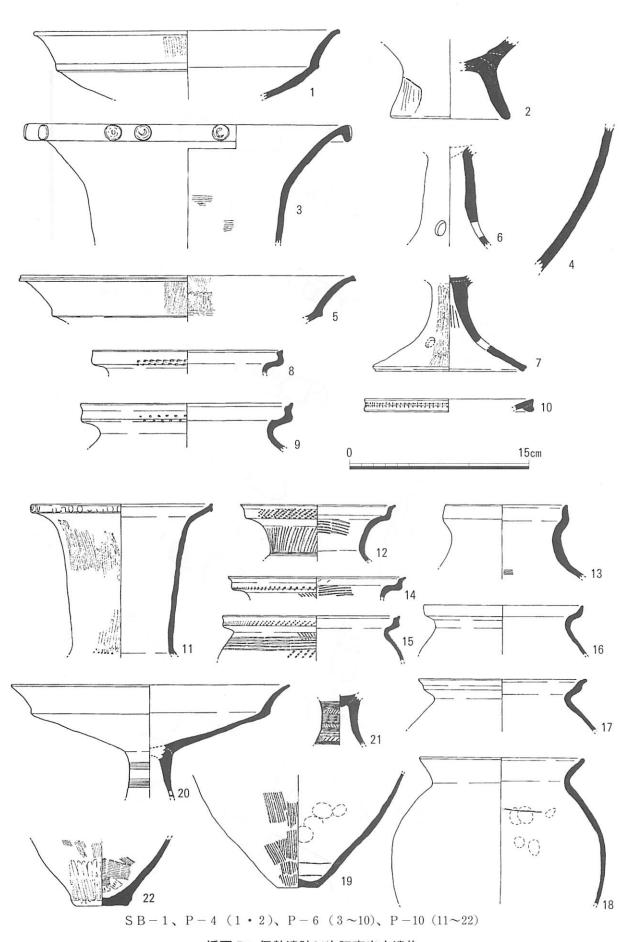
P-6 3は広口壺の口縁部で、大きく外反する口縁部の端部は逆三角形状に垂下しており古い様相を残している。竹管文を施す円形浮文が施される。4は大型の壺の体部下腹部の破片で、15cm四方程の大きさであり、同一個体の破片が複数出土していることから混入したものではないと考えられる。胎土は生駒西麓産の特徴をもち、搬入された土器とみてよい。5は屈曲する口縁部をもつ高坏で、外上方へやや外反する。端部は面をもち下端部に肥厚する。6は円筒状の脚中部をもつ高坏脚部で、円盤充填法による。7はやや小型の高坏脚部で、緩やかに円錐状に開脚する。端部は面をもって終わり坏部との接合は挿入式による。8・9は受口状口縁塾である。8は第1口縁部が水平に開いた後第2口縁部が内傾し立ち上がり端部は面をもって終わる。端部のつまみ出しも見られず後期前半の古い様相を示している。9は頸部の立ち上がりが明瞭で外上方へ開く第1口縁部から垂直に立ち上がる第2口縁部が付く。端部は外上方へややつまみ出しており後期中葉から後葉の特徴を示している。10は器台口縁部で端部は逆三角形状に垂下する。

P-10 11は長頸壺で円筒状の頸部から上端部で短く外反する。端部には竹管文が施され、頸部付け根にも列点文が加えられている。12は受口状口縁壺で第2口縁部が垂直に立ち上がった後、端部を外上方につまみ出す。後期中葉の形式的特徴を示す。13も受口状口縁壺であるが、在地の壺とは異なり屈曲も甘く、胎土も精良な粘土を使用しており無文である。14は受口状口縁壺で、水平に開く第1口縁部から垂直に立ち上がる第2口縁部が付く。典型的な在地の土器で、端部は外方へつまみ出す。15は受口状口縁鉢で、短く外上方へのびる第1口縁部から屈曲し短く上方へ立ち上がる第2口縁部が付く。やはり後期中葉から後葉の特徴を示す。16は在地のものではない受口状口縁塾で、屈曲が甘く無文の個体である。17は肩が張り口縁部の屈曲が甘いもので、古墳時代前期にまで下がる形態的特徴を示す。18は球形の体部から短く、くの字状に外反する塾で端部は内側に肥厚する。内面につなき痕を残し、古墳時代前期に下る特徴を持つ。20は屈曲する高坏で、口縁部が短く外半する。坏部との接合は挿入式で、脚中部に櫛描直線文が加えられ、後期中葉の特徴を持つ。21は高坏脚中部で、著しく加飾されている。円盤充填法によっている。22は壺底部とみられ外面に箆磨きが加えられる。19は在地の受口状口縁塾の底部で中腹部の器壁が薄く仕上げられている。底部も平底で後期中葉の特徴を示す。P-8 23は整底部で在地の土器と見られる。24は高坏脚中部で杯部との接合は挿入式である。

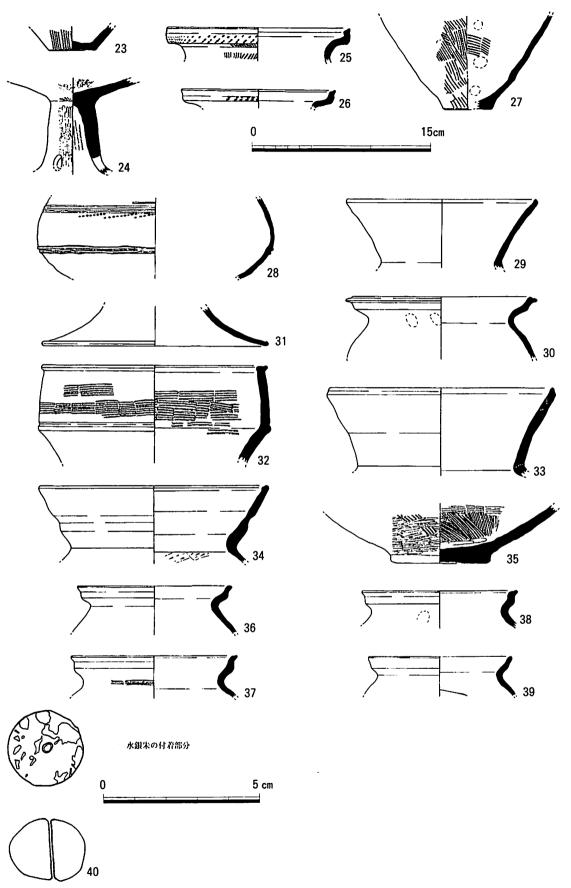


挿図 3 第21次調査全体図





挿図 5 伊勢遺跡21次調査出土遺物



SB-1、P-8 (23・24)、P-11 (25~27)、P-6 (40)、SH-1 (28)、SH-2 (29・30)、SK-1 (31~39) 揮図 6 伊勢遺跡21次調査出土遺物

P-11 25・26は受口状口縁塾で、25は頸部の立ち上がりが明瞭で水平に開く第1口縁部からやや内傾し立ち上がる第2口縁部よりなる。後期前葉の形態的特徴を持つ。26は短く立ち上がる第2口縁部をもち、やや端部をつまみ出しており後期中葉の特徴を示す。27は塾の底部とみられ内外面ともに刷毛で調整される。

SH-1 28は受口状口縁鉢の体部と見られる。ただ胎土が精良であることなどから手焙り型土器の可能性も残る。体部の列点文が横方向に傾いていること、下腹部の貼り付け突帯が中央分割のみで粗雑なことから後期後葉の特徴を示しているといえる。

SH-2 29は直口壺の口縁部で、上端部をやや摘み上げる。30の受口状口縁甕は屈曲が甘く、口縁端部が外下方へつまみ出される。ともに古墳時代前期の特徴を示すものである。

SH-4 31は円錐状に開脚する高坏脚部で端部は丸く収められる。

SK-18 32は口縁部が内傾し立ち上がる大型の壺で、内外面に刷毛が加えられる。山陰系の壺で、灰白色系の胎土をもち搬入品と考えられる。33は直口壺で上端部をやや摘み上げる。34は二段に屈曲し外上方へ内湾気味に開く壺で、頸部内面に箆削りが観察される。山陰系の壺か。35は大型の壺底部で、外面に細かい横方向の箆磨きが加えられている。胎土は32の壺と同質で、同一個体の可能性が高い。36~39は受口状口縁塾でいずれも屈曲が甘く、古墳時代前期末の特徴を示している。

なおSB-1のP-6からは直径2.1cmを測る土玉が出土している。中央には1mmほどの細い穿孔がみられ、紐をとおして使用されていたことがわかる。表面には水銀朱が塗られており、祭祀に使用されていたと考えられる。

21次調査では以上の土器が出土したが、出土土器から各遺構の時期についてまとめておきたい。出土土器の形態的特徴から弥生後期と古墳時代前期の土器群に大別される。弥生後期は、大型建物を中心に後期前葉の特徴を持つ土器群と後期半ばの特徴を持つ土器群が見られる。これらは竪穴住居等の一括性の高い土器群の比較検討を行った結果、共存するものではなく確実に時間差が見積られるものである。そして竪穴住居には弥生後期後葉と古墳時代前期の二者がみられ、後者にはSK-18等の土壌が伴うものと考えられる。大型建物の柱穴の覆土は地山ブロックが多量に混入する特徴があり、意図的に埋められており、断面観察からも柱根が残存しておらず抜き取られていると考えられる。大型建物出土土器にみられる新旧の土器群の存在は、建物造営期と廃棄し埋め戻された時期の時間的ヒアタスと考えるべきであろうか。その後、弥生後期後半から古墳時代にかけて竪穴住居群が営まれており、大型建物は完全に廃絶していたことがわかる。

4 調査成果のまとめ

第21次調査の成果を確認すると、①2間×4間($7.8m\times11.3m$)床面積88mを測る大規模な建物が検出された。②このSB-1に隣接するSB-2や柵などで構成された特殊な空間がこの地点に存在することが確認された。③これらの施設は弥生時代後期中葉末に廃絶されており、後期前葉末に造営年代が遡る可能性がある。④後期後葉にはこの地域に竪穴住居が営まれており、掘立柱建物群で構成された特定区画はすでに失われていたことがわかる。⑤その後、古墳時代前期まで竪穴住居や土壌が営まれている。⑥その後、古代末から中世にかけて掘立柱建物がみられ再び集落が営まれている。伊勢遺跡全体のなかでも、SB-1の出現は初期段階にあり遺跡形成の端緒であったと考えられるが、後期後葉には大型建物は廃絶されており、比較的短期間にその役割を終えていたことが想定されるのである。

本調査では大型建物 (SB-1他) が確認され、弥生時代後期の近畿地方にも大型建物が存在する

ことを証明した。この調査以後、近畿各地の集落遺跡で大型建物の存在が次々と確認されていった。 伊勢遺跡中心部ではその後、18・21次調査及び第2次調査の成果を合わせて検討することによって二重 の柵によって方形に区画された中にSB-1をはじめとする大型建物群が整然と配置されていること が判明した。弥生時代後期に方形区画と呼ばれる特定の区画が集落中心部に形成されていることから、 首長権力の強大化・地域政権の成熟化が予想以上に進行していたことが判明するのである。近畿地方 の弥生時代研究史の上でも、伊勢遺跡のSB-1の発見は重要な位置を占めているといえよう。

大型建物は全国でも最大規模のもので、貴重な遺構であることから平成4年9月19日現地説明会を 実施した。説明会には全国より千人以上の見学者が訪れた。同調査地点は伊勢遺跡の中心部にあたり、 重要な遺構と考えられることから、市教委は地権者と協議の上、代替え地を検討する一方で土地を借 り上げる形で開発を回避することで合意した。確認調査の開始の出発点となった調査である。

第2節 第46次調査の成果

1 調査の経緯と経過

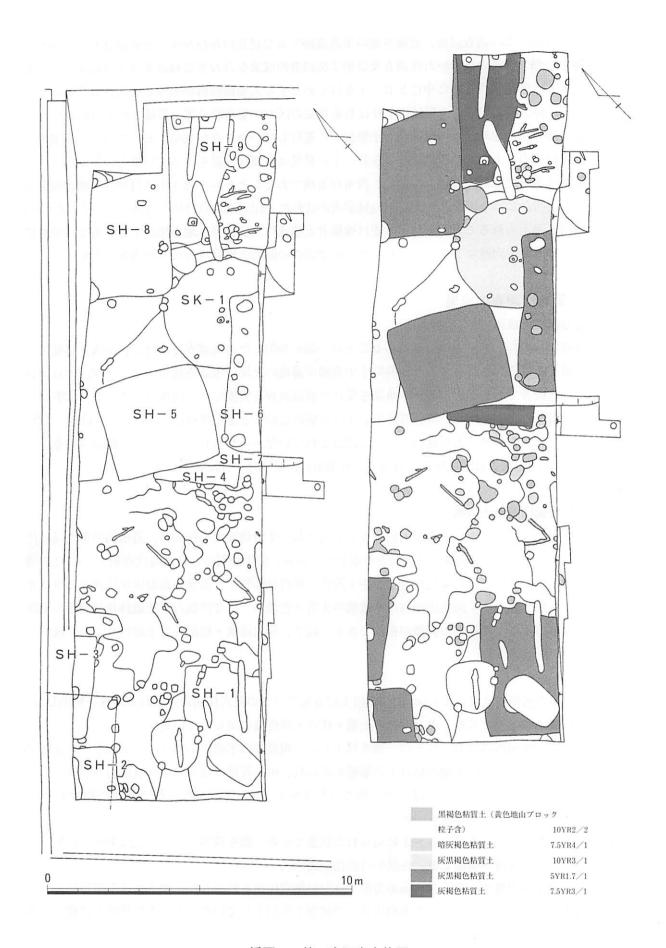
伊勢遺跡が特異な内容をもつ遺跡であることの一端が判明した21次調査を受けて、平成6年度より同地点の借り上げ保存を行ってきた伊勢町字中東浦80番地の土地の未調査地である北西部分約 $120\,\mathrm{m}^2$ について、地権者である小田 宏氏の承諾を受けて確認調査を実施した。同地点(T-1)は第2次調査と21次調査の間にあたり、伊勢遺跡中心部の遺構の広がりと連続性を把握することを目的とした。合わせて、21次調査の際、大型建物の一部と認識されていなかった SB-3 について確認調査を行った(T-2)。確認調査は平成10年1月22日より開始し、同3月4日に終了した。

2 検出した遺構と出土遺物

耕作土・床土直下の地山である黄灰色シルト上面において遺構検出を行った。遺構面の平均高は標高98.3mを測る。検出した遺構は21次調査の成果などから、弥生後期から古墳時代前期と見られる暗黒褐色系粘質土、中世の暗灰褐色粘質土、中・近世の灰白色砂質土、近世の黄混灰褐色砂土の主に4つの埋土に分類できる。平面検出における遺構の土質・色調については概ね伊勢遺跡及び周辺の遺跡において以上のような時期別の特徴が指摘できる。以下、検出遺構・検出時出土遺物について説明を加える。

T-1

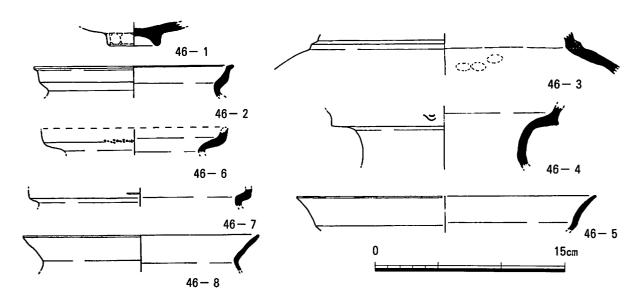
- SH-1 調査区南隅において4.2m×2.5m以上の方形プランの竪穴住居とみられる遺構を検出した。 暗灰褐色粘質土の埋土である。中・近世の土壙・柱穴・耕作痕に切られている。
- SH-2 調査区南西隅においてその一部を検出した。規模等は不明であるが、1.8m以上の方形プランの住居と見られる。暗灰褐色粘質土の堆積がみられ、中・近世の柱穴・耕作痕に切られる。
- SH-3 SH-2に隣接して一辺3.5mを測る方形プランの竪穴住居とみられる遺構を検出した。 SH-1と同一の埋土で、方位も一致する。
- SH-4 調査区中央で $SH-5\sim7$ に切られた状態でその一部を検出した。一辺 $2.7\,\mathrm{m}$ と小型であるが、コーナーの屈曲が明確で竪穴住居の可能性が高い。
- SH-5 調査区中央で、3m×4mの方形プランの竪穴住居を検出した。埋土は暗黒褐色粘質土で他の住居より暗い色調であった。平面検出時に壺底部1が出土している。ドーナツ状の上げ底で、外面に指頭による押圧が巡る。
- SH-6 調査区中央東隅においてその一部を検出した。一辺5.1mを測る方形プランの竪穴住居と



插図7 第46次調査全体図



挿図8 第46次調査T-2平面図及び調査位置図



T-1, SH-5 (46-1), SH-8 (46-2), T-2, $SB-3 \cdot P-1$ (46-3), SH-1 (46-4~8)

挿図 9 46次調査出土遺物

みられる。 $SH-7 \cdot SK-1$ を切り、中・近世の柱穴等に切られる。埋土はSH-5と同じく暗黒褐色粘質土であった。

SH-7 調査区中央でSH-4を切り $SH-5\cdot 6$ 、SK-1に切られた状態でその一部を検出した。一辺3.7m以上の方形プランの住居と見られる。やや明るい黒褐色粘質土の堆積がみられた。

SH-8 調査区北隅においてその一部を検出した。一辺6m以上の方形プランの住居と見られる。 SH-9を切り、中世の柱穴に切られている。暗茶褐色粘質土の堆積がみられ、平面検出時に受口状口縁整2が出土した。口縁部の屈曲が甘く、無文である。古墳時代前期の遺物と見てよい。

SH-9 SH-8に切られ調査区北隅においてその一部を検出した。中・近世の柱穴・土壙・耕作痕に切られる。灰茶褐色粘質土の堆積が見られた。

SK-1 SH-7 を切り、SH-6 に切られた状態で円形プランの土壌を検出した。直径 4 m程あり、住居の可能性もある。黒褐色粘質土の堆積がみられた。

SB-1 調査区南西隅で1間以上×2間以上の掘立柱建物の一部を検出した。柱穴間の距離は約1.5 mを測る。埋土から中世の建物と推定される。

この他、多数の柱穴・土壌を検出したが、建物等の復元及び性格の特定には至らなかった。T-2

 $18 \cdot 21$ 次調査区の接点にあたり、大型建物 SB -3 と竪穴住居が切り合っている地点にあたる。その切り合い関係を確定する必要があると判断し、再調査を行った。

SB-1 P-1 長径1.6m、短径0.8mを測る不整楕円形の柱穴である。北側の掘方が狭くなっており、落とし込み構造をもつ柱穴と考えてよい。位置関係から棟持柱とみられるが、建物の軸線から約 40° 西側に振っており、18次調査で検出された南側の棟持柱の乱れに一致する。柱位置が建物の梁行に近いことから近接棟持柱付き建物と考えられる。柱の痕跡は見られず、SB-1と同じく地山ブロックが混在する黄褐色粘質土が一面に堆積しており、柱は抜かれ意図的に埋め戻されたものと考えられる。P-2 はSB-3 の西側桁柱の北隅にあたる柱穴である。長径2.3m、短径1 mを測る長楕円形を呈す。埋土はP-1と同じく地山ブロックが多量に混入する黄褐色粘質土の一面の堆積で、柱痕跡は認められなかった。SH-1 に切られており、18次調査の結果と一致した。柱穴検出時に壺肩

部破片 3 が検出された。大型の広口壺の肩部にあたり、貼付け突帯が頸部付け根に施されている。生物西麓産の胎土の特徴を持ち、搬入品と考えられる。形態的特徴から後期前葉~中葉初頭の所産と見られる。SH-1 は、18・21次調査地点にまたがり検出された竪穴住居である。6 m×7 mを測る方形プランの住居である。SB-3 の柱穴を切っており大型建物が廃絶した後に営まれた住居であることがわかる。埋土は明るい黒褐色粘質土で地山ブロック等は含まれていなかった。平面検出時に4~8の土器が出土している。4 は二重口縁壺の頸部である。直立する頸部から短く水平に外反し再び上方へ立ち上がる。口縁部外面には櫛描波状文が施される。5 は屈曲高坏の口縁部で、短く外反し端部は尖頭状に納められる。6 は受口状口縁型の口縁部で、外上方へ第1口縁が開いた後、緩やかに屈曲し上方へ立ち上がる第2口縁よりなる。口縁部頸部に横列点文が加えられる。7 は受口状口縁鉢と見られるが、手焙り型土器の可能性もある。8 はくの字状に外反する甕の口縁部で、薄く仕上げられている。二重口縁壺が出土していること、高坏の外反が明瞭であること、横列点文が顎部に加えられた受口甕が出土していることから弥生後期後葉から末にかけての遺物群とみられる。

3 調査成果のまとめ

本調査によって①21次調査区北西側には弥生後期から古墳時代前期にかけて竪穴住居が多く営まれている。②竪穴住居には小型(3 m前後)、中型(5 m前後)、大型(6 m以上)のサイズが見られる。 ③大型建物SB-3 は後期後半の竪穴住居に切られており、その時期には方形区画も廃絶していたと考えられる。④その後、竪穴住居群がこの地域に古墳時代前期末頃まで営まれている。⑤平安時代末から鎌倉時代にかけて掘立柱建物群が営まれている事などが確認された。

方形に区画する柵の延長部が確認できるのではと期待されたが、竪穴住居が稠密に営まれており、 平面検出調査では確認する事ができなかった。しかし、方形区画と大型建物群が先行して営まれた後、 竪穴住居群が後期後半から古墳時代前期にかけて次々と作られており、この時期には伊勢遺跡の特定 区画は機能していなかったことが想定された。

確認調査の成果については平成10年3月1日、地元説明会を開催し、平成9年度の伊勢遺跡の調査成果を合わせて報告した。地元説明会では地元伊勢町の方々を中心に、約40人の参加を得て小雨の中行った。

第3節 第48次調査の成果

1 調査に至る経過

平成9年10月8日から同11月6日にかけて、共同住宅建設に先立ち44次調査が行われた。この調査によって弥生後期の竪穴住居1棟、土壙2基、柱穴多数を検出した。その後、開発に伴い平成10年1月23日に擁壁工事が行われた。擁壁工事に伴い未調査部分を掘削している現場に立ち会い、大きな柱穴が存在することを確認した。大型建物の柱穴である可能性があり、工事を中止させ2日間にわたり緊急調査を行った。その結果、棟持柱とみられる柱穴1基と桁柱と推定される柱穴1基の計2つの柱穴を検出した。そのうち棟持柱からは柱根が出土した。2つの柱穴の構造や配置から独立棟持柱付き大型建物である可能性が高く、南側にむかって建物がのびると推定された。この場所は畑地として利用されていたが、伊勢町在住の地権者である山川芳志郎氏の理解を得て約150㎡を対象に確認調査を実施した。調査は平成10年5月21日から同6月19日の期間実施した。同報告では緊急調査分と合わせてその成果を報告する。

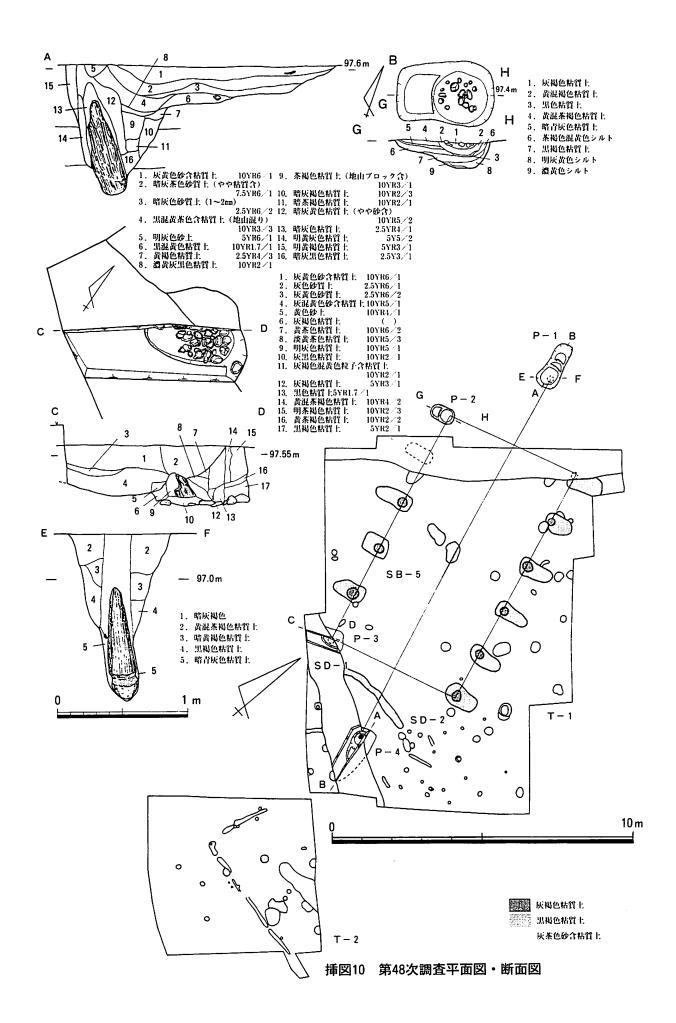
2 検出した遺構と出土遺物

耕作土・床土直下の黄色シルト上面で遺構検出を行った。遺構検出面の平均高は標高97.7mを測る。 緊急調査の成果から南側に建物が延びると判断し、調査を行った結果、予想通り大型建物SB-5を T-1で検出した。更にその南側の遺構状況を確認するためにT-2を設定し、調査を進めた。 T-1

SB-5 1間×5間(4.6m×8.6m) の床面積39.56㎡を測る大型建物である。 棟方向は N −14°− Wと西側に振れる。各柱穴の長径は1.2m、短径0.6mを測る。平面形は長楕円あるいは長方形を呈す。 桁柱列は建物の外側にむかって狭くなっており、落とし込みのための斜路をもつ掘り方と推定される。 つまり、桁柱はすべて建物の外側から内側に向かって落とし込み、建てあげられたと考えてよい。こ れは、平成6年に発見されたSB-4(SB-5の北側約18mに位置する)と同じ掘り方であり、柱 穴の配置や構造についてもほぼ同様と考えてよい。棟持柱は梁から大きく外側に離れた位置にある2 本の独立棟持柱と、建物中央に位置する屋内棟持柱1本によって支えられたと推測される。しかし、 屋内の棟持柱は二回り程柱掘り方が小さく、実際SB-4では棟持柱が直径40㎝の規模に対して、中 柱は20㎝弱と小型の柱が使用されていた。以上の事実関係から屋内の棟持柱は棟まで達していたかど うか疑問が残るところである。柱穴は暗茶褐色粘質土の堆積が見られ、柱根位置には直径30~40㎝ほ どの灰褐色粘質土の堆積がみられた。恐らく、柱穴内には柱が残存していると考えてよい。桁柱間の 距離は1.7mと隣接するSB-4と比較して10m程短い。しかし、棟持柱の位置は梁行の壁から2.5m 外側に離れた位置にあり、SB-4と共通している。いずれにせよ、SB-4・5はすべての柱穴が 存存していると考えられ、二棟が同時に存在していた可能性は高い。二棟の位置関係はSB-4の南 側の棟持柱(P-4)から南へ17.8mの位置にSB-5の北側の棟持柱が据えられており、二棟の建 物は南北方向に並列する形で配置されていたと考えられるが、SB-5の棟方向はN-21°-Wと8 ° 東側に屈折していて直列ではない点に特徴をもつ。

2月の緊急調査では北側の棟持柱(P-1)と西列北隅の桁柱(P-2)を掘削調査した。今回の確認調査では平安時代時代の溝(SD-1)に切られた南側の棟持柱(P-4)と西列南隅の桁柱 (P-3)を掘削し調査を行った。以下、各柱穴について説明を加える。

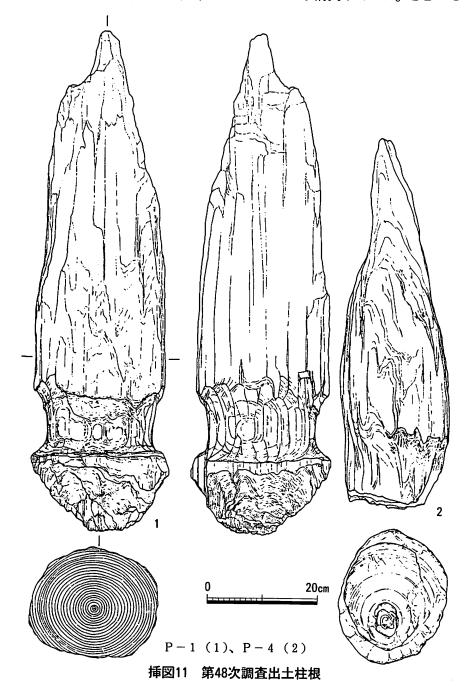
P-1 長径2.1m、短径0.9mを測る長楕円の柱穴である。断面形は北から南側に向かって緩やかに傾斜し、柱根を最深部として垂直に立ち上がり、斜上字を呈す。深さ約90cmを測る。柱根部分には柱が腐食した部分に灰褐色粘質土の堆積がみられ、斜路掘り方には版築状に埋め固めた様子が観察された。柱根の残存長は90cm、直径35cmを測る。かなり腐食しており断面観察から推測される直径は40~45cm程と推測される。柱根先端は尖頭状に加工されているほか、幅10cmほど溝が穿たれており運搬途中の縄掛けの細工と考えられる。柱は約8°内傾した状態で据えられていた。棟持柱が建物側にむかって内傾する点でもSB-4と共通する。材質はヒノキである。柱穴の斜路掘り方底から1~3の土器が出土している。3は特にかたまった状態で出土しており、建物造営時に埋納された遺物と考えられる。1は長頸壺の頸部片とみられる。2は受口状口縁墾の肩部で直線文・波状文が加えられる。3と同一個体の可能性もある。3は受口状口縁墾で、1/4ほど残存している。頸部に明確な立ち上がりを持ち、第1口縁部は外上方にのび、第2口縁部は直立する。口縁端部は外上方に大きくつまみ出されており、後期後葉の特徴を示している。口縁顎部に列点文が加えられ、右方向に順次流して施文している。肩部には櫛描直線文、列点文が施されているが列点文も経方向に加えられ刺突後右方向に流している。腹部の器壁は薄く仕上げられている。口縁部の形態的特徴から大型建物のなかでも最も新しい遺構と考えられる。

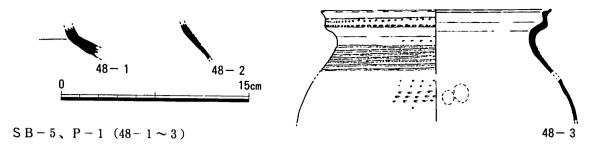


P-2 擁壁工事の際、遺構面より10cm程削平されており、柱根部分は削平されたと考えられるが、僅かに木片が残存していた。残存長径0.9m、短径0.6mを測り、平面形は楕円形を呈す。断面形は椀状を呈するが斜路部分は失われていると考えられる。断面を観察すると基底部に精良な粘質土を幾重にも充填し、その上に $5\sim8$ cm程の川原石を円形に敷き詰めている。この川原石の上に柱根が据えられていたと考えられる。このような柱穴底の円礫構造はSB-4の桁柱列や野尻地区SB-6に共通するものである。なお遺物等は出土しなかった。

P-3 SD-1に切られて大半は消失していた。西側桁柱列の南隅の柱穴である。僅かに柱根の木片が残存していた。やはり、柱穴基底部には $5\sim8$ cmほどの川原石が敷き詰められていた。柱穴の長径は約1 m、短径0.6mを測り、平面形は楕円を呈する。残存深度は30 cmを測り、断面形状から斜路をもつと推定される。

P-4 南側の棟持柱の柱穴で、やはり大半はSD-1により消失していた。SD-1の北岸と南岸





插図12 伊勢遺跡第48次調査出土遺物

に柱掘方の輪郭が残ることから長径2.1m、短径0.9mの柱穴の平面形を復元できる。残存深度は0.7mを測り、掘り方南側に斜路をもっている。梁行の壁から2.5m離れた地点に棟持柱が据えられていて、北側の棟持柱の位置と一致する。棟持柱は残存長0.6m、幅0.4mを測る。柱根下部に切り込みが見られ、運搬時の縄掛け痕と考えられる。やはり建物側に向かって8°内傾した状態で柱が据えられておりP-1と共通する。柱材はヒノキである。P-1・4出土柱根については奈良文化財研究所、光谷拓実氏に依頼して年輪年代測定を行ったが、樹木の成長が早く年輪数が少ないことから、気候変動パターンの照合ができない資料であった。樹木の成長が早く年輪数が少ない点ではSB-4のすべての柱、SB-5の2本の棟持柱ともに共通する傾向である。

SD-1 調査区の南隅において東西方向に流れる溝SD-1を検出した。幅1.2 m、深さ30cmを測り断面形は浅い椀状を呈する。灰褐色砂質土の堆積があり、溝底には灰白色細砂の堆積がみられ常時水流があったことがわかる。出土遺物から平安時代(10世紀後半)頃の溝と考えられる。

SD-2 SD-1に切られた状態で、SB-1の南梁と棟持柱の間で幅20cmを測る弧状の溝を長さ 2.8mにわたって検出した。埋土は黒褐色粘質土で、SB-5の柱穴埋土に共通する。大型建物に関連する施設であった可能性がある。栗東市下鈎遺跡の独立棟持柱付き大型建物にも同様の溝があり、目隠し塀の存在が想定されている。

黒褐色粘質土の遺構としてSB-5に平行する柱列をその東側で検出している。2.5mの間隔で並ぶ。その他、柱穴が検出されているが建物等を想定するには至らなかった。

T-2 T-1 の南側にトレンチを設定した。

小さな柱穴群を検出したが構造物を想定するには至らなかった。この他、L字状の小溝を検出しているが、性格等については不明である。

3 調査成果のまとめ

本調査によって新たに1棟の大型建物が検出された。その成果について以下列記する。①平成6年に発見されたSB-4の南側約18mの地点に独立棟持柱付き大型建物(SB-5)が南北方向に縦列に造営されていたことが判明した。②二棟の建物は棟方向を約8°東側に屈折する形で配置されており直列ではない。③伊勢遺跡における独立棟持柱付き大型建物は梁行4.5m、桁行9mを標準サイズとするが、SB-5は梁行4.6m、桁行8.6mと桁柱間が約10cm短い点に特徴がある。④しかし、1間×5間という間取りや、梁から2.5m外側に離れた位置に棟持柱を据える点など共通する規格をもっている。⑤さらに、柱穴底に円礫を敷いたり、棟持柱を建物の内側に約8°内傾させ柱を据えたり、SB-4との共通性が認められる。⑥直径40~45cmのヒノキ材が使用されている。⑦柱根に運搬時の縄掛けの痕が見られる。⑧SB-4と同様にSB-5には殆どの柱根が残存しているとみられる。⑨屋内中央にも棟持柱と考えられる柱穴が見られる。しかし、その規模は小さく、棟まで届く柱とは考え難い。

伊勢遺跡における独立棟持柱付き大型建物は、それぞれ若干の個性を持ちながらも高い規格性をもち、次々と造営されていったことがわかる。SB-5から出土した土器から弥生後期後葉の造営年代が想定され、伊勢遺跡のなかでも最も新しい段階の大型建物と考えられる。出土土器からもSB-4とSB-5は同時に存在した可能性が高い。

今回の調査成果は、擁壁工事の立会によって得られた情報から、新たに大型建物が発見された例である。小規模開発であっても重大な情報をもたらすことを示しており、開発内容の確認や現地確認の必要性を痛感する。平成10年5月25日には伊勢町自治会を中心に40名余りの市民の参加を得て遺跡発掘体験学習会を開催し、表土掘削・平面清掃などの作業を通して伊勢遺跡への理解を深めていただいた。なお、調査成果については平成10年6月7日伊勢町を中心とする地元説明会を、同6月14日には一般市民を対象とした現地説明会を開催し、約400人もの市民に見学して頂いた。

第4節 第49次調査の成果

1 調査の経緯と経過

平成10年6月、阿村町字上番田143-1番地他の水田地で、五洋建設株式会社より工場建設計画にともない市教委に遺跡の有無についての照会があった。この地域は伊勢遺跡の範囲内にあり発掘調査が必要であると回答するとともに、事前に確認調査を実施し遺構の広がりや性格について把握する必要があることを伝えた。その結果、阿村町在住の地権者である藤井五郎氏の承諾を得て、確認調査を実施し遺構の状況を把握することに努めた。確認調査は、平成10年9月16日から開始し、同10月2日に終了した。終了後、開発に伴う基礎工事による地下遺構の破壊を回避することができないか設計変更等の協議を行った。開発計画は変更できないとの回答を受け、平成11年5月10日から8月25日の期間、原因者負担による本調査を実施した。その成果については伊勢遺跡第56次調査報告書・守山市文化財報告書(平成13年3月刊行)に収録している。

確認調査では、遺構面の深さや弥生後期を中心とする遺構の広がりについて把握することに努め、 重要な遺構の有無について調査をおこなった。微高地上の平均遺構検出面は99.2mを測る。

2 検出した遺構と出土遺物

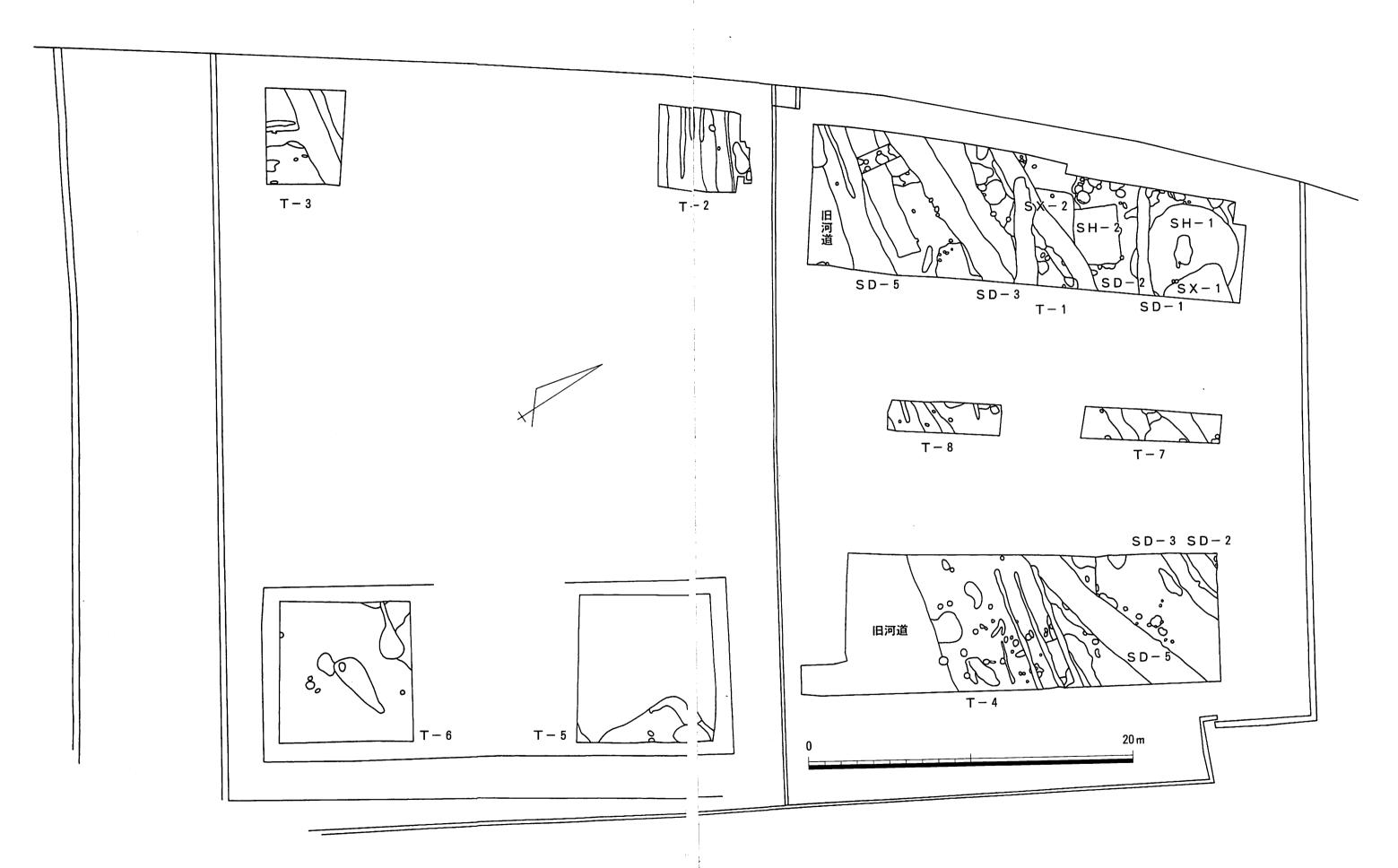
開発対象地の北東部に微高地があり、この地域を中心に遺構が広がっていることが予想された。周辺部の調査成果から、開発地の2/3にあたる南半部分には古墳時代から奈良時代にかけての旧河道が広がり、地形的にも1 m以上落ち込むと想定されたため、北東部を中心に平面検出を行った。確認調査では、計8つのトレンチを設け、遺構の把握に努めた。

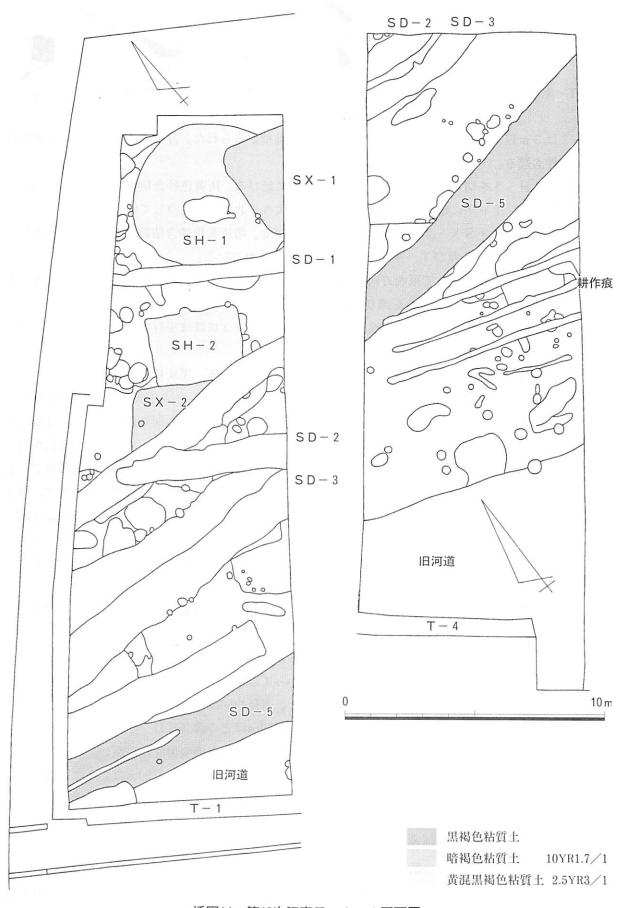
T-1

SH-1 トレンチ北東隅において検出した。直径6m程の円形プランの竪穴住居である。黒褐色粘質土の堆積がみられ、不定形の落ち込みSX-1と東西方向に延びる溝SD-1によって切られている。伊勢遺跡では方形住居が主流を占めることから、中心部の大型建物と同様に後期中葉に営まれた竪穴住居の可能性がある。

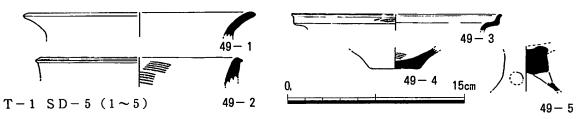
SH-2 SH-1 の南西側でその一部を検出した。灰褐色粘質土の堆積がみられ、不整方形の落ち込み SX-2 及び東西方向に延びる SD-2 にきられていた。一辺 $3.5\,m$ を測る小型の竪穴住居と見られる。 SH-1 ・ 2 の周囲に大きな土壌あるいは柱穴を幾つか検出したが、構造物を特定するには至らなかった。

SX-1・2 竪穴住居を切って不整方形の落ち込みを検出している。SX-1は一辺約4mを測り





插図14 第49次調査T-1・4平面図



插図15 伊勢遺跡第49次調査出土遺物

SX-2は3m以上の規模で、伴に灰黒褐色粘質土の堆積がみられた。詳細は不明であるが、竪穴住居の可能性も残る。

SD-1 SH-1 を切ってトレンチに直交する方向に延びる。灰黄色砂含粘質土の堆積がみられた。幅約70cmを測る。T-7 に延長部が検出されており、大きく北東部へ湾曲している。

SD-2 $SH-2 \cdot SX-2$ を切って東西方向に延びる。暗灰黄色砂含粘質土の堆積が見られた。幅約1.3mを測る。T-7及びT-4 北隅に延長部が検出されている。

SD-3 SD-2 に平行して東西方向に延びる。SD-4 を切っており、T-4 北隅では 1 本に合流しているように見える。幅1.4mを測り、灰黄色砂質土の堆積が見られた。

SD-4 SD-3に切られた状態で検出されている。SD-3にほぼ平行するが本来は同一の溝が下流において流れを変えたものと考えられる。

SD-5 調査区南隅において東西方向に流れる溝を検出している。黒灰褐色粘質土の堆積が見られ幅1.9m、深さ約30cmを測る。浅い椀状の断面形を呈す。T-8及びT-4中央でその延長部を検出しているが、東に行くに従って北方へ湾曲していく傾向がある。他の溝も同じ傾向を示し、地形に合わせて溝が開削されているためと考えられる。SD-5の一部立ち割りによって1~5の遺物が出土している。1は短く外反する壺の口縁部で、端部は円頭状に収めている。2は短頸壺の口縁部で、上端部に面を持ち外方へ肥厚する。頸部内面を横刷毛で調整する。3は受口状口縁墾の口縁部で、第2口縁がやや外傾し立ち上がり、外方へ端部をつまみ出す。口縁外面に櫛描波状文あるいは直線文が施されている。4はやや突出する平底で壺の底部と見られる。内面に横刷毛が施されている。5は高坏脚中部で、杯部との接合は挿入法によっている。三方透かしを持ち、脚中部は中実である。以上の土器群の形態的特徴から弥生後期から古墳時代前期の溝と考えられる。

T-1 のSD-3 からSD-5 にかけて灰褐色粘質土が約15cm程堆積していたが、今回の確認調査では一部を断ち割るにとどめた。

T-2 T-1の南西側に一辺5 mほどのトレンチを設定した。トレンチ北壁側では耕作土・床土直下で地山の黄色シルトが検出されたが、南西側に向かって急激に落ち込んでおり、旧河道の肩部と考えられた。その肩部に茶褐色粘質土の不定形の堆積と、直径約50cm程の柱穴を3つ検出した。柱穴には灰褐色粘質土の堆積が見られた。トレンチ中央では幅50cmほどの溝(SD-6~8)を検出した。東西方向に延びる細い溝で、灰黄色砂質土の堆積がみられた。耕作痕の可能性が高い。

T-3 T-2の南西15mの地点に5m四方のトレンチを設けた。表土より90cmほど下に遺構面があり地形的にかなり下がっていることがわかる。中央部で東西方向に延びる溝SD-9を検出している。 灰褐色砂含粘質土の堆積が見られた。

T-4 T-1 の東側15mの地点にそれに平行するトレンチを設定した。耕作土・床土直下の黄色シルト上面で検出を行った。その結果、 $SD-2 \cdot 4 \cdot 5$ の延長部を検出した他、T-2 で検出した旧河道肩部のラインを検出した。この他、東西方向に規則的に並ぶ 3 条の溝を検出したが、耕作痕と見られる。また、茶褐色系の粘質土が堆積した柱穴及び土壌を検出したが、構造物を想定するには至ら

なかった。

T-5 T-4の南東側に一辺10mほどのトレンチを設定した。地表下約90cmで黄灰色シルトの堆積を確認したが安定した遺構面とはみられず、旧河道内と推測された。

T-6 T-5の南東部10mの地点に一辺10m程のトレンチを設定した。暗黄灰色粘質土のベース上面で遺構検出を行った結果、暗黄混茶色粘質土の不定形の落ち込みを検出した。しかし、明確な遺構は見られなかった。同遺構面で灰白色細砂の広がりも観察されたことから、自然の落ち込みに粘土や砂が堆積したものであろう。

 $T-7 \cdot 8$ T-1 & T-4 の間に細長いトレンチ 2 つを設け、溝の連続性を確認した。その結果、耕作土・床土直下で $SD-1 \cdot 2 \cdot 3 \cdot 5$ を検出しそのつながりが確認された。

3、 調査成果のまとめ

開発計画に先立って確認調査を実施した結果、以下のことが確認された。①現況の地形からも判断されるとおり調査対象地の南半部は急激に落ち込み、そこに大規模な旧河道が存在すること。②旧河道の落ち際に地形に沿って古墳時代前期から中世にかけての溝が開削されている。③微高地側には円形および方形の竪穴住居が営まれているが、その数は大洲地区に比べて希薄である。

大型建物等の特殊な遺構は検出されなかったが、今回の調査によって伊勢遺跡の南東部端の状況を 押さえることができた。

第5節 第50次調査の成果

1 調査に至る経緯及び経過

平成10年7月、株式会社伊藤工務店より、伊勢町字南東浦92・93の水田地において共同住宅建築を目的とした開発計画に先立ち、遺跡の有無について照会があった。市教委では同地域は伊勢遺跡の重要遺跡範囲内にあたることから事前に確認調査が必要であり、その成果如何では開発計画を進めることができない旨、回答した。同地点の開発については今後の遺跡保存や活用にも支障をきたす可能性があるため、開発計画について再検討するよう申し入れた。しかし、開発に対する意向が堅く、地権者である奥村忠夫氏の承諾を得て事前に確認調査を実施した。確認調査は平成10年10月12日から同11月12日までの期間実施した。調査終了後、その成果をもとに協議を行った。開発計画については変更できないが、開発する場合は遺構が検出された地点については保護層を設け、地下遺構を破壊しないように設計変更することで合意した。

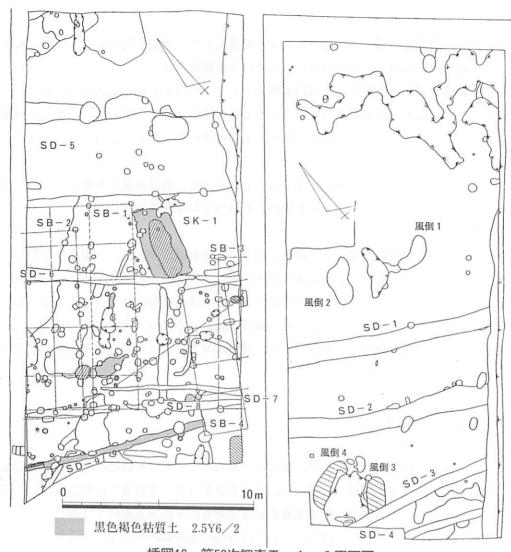
2 検出した遺構及び出土遺物

開発対象地約1246㎡について、2つのトレンチを設け、確認調査を実施した。この地域は平成7年に完成した区画整理事業地にあたり、重機稼働の影響を若干受けていた。耕作土直下の黄色シルト層上面において遺構検出を行った。細長い調査地の南東側は1m以上客土されていた。現在の水路に平一行して幅15m以上の旧河道が存在することが判明した。遺構検出面の平均高は97.7mを測る。

T-1 調査区南西部は旧河道によって遺構が失われていたほか、北東部は区画整理時の重機によって攪乱をうけていた。

SD-1 調査区中央において、東西方向に流れる溝を検出した。48次調査で検出した溝SD-1の 上流部分にあたる。検出幅1mを測り、灰黄色砂土の堆積が認められた。

SD-2 SD-1 に平行してその南西側で溝を検出した。幅90cmを測り、灰褐色砂土の堆積を確認した。



插図16 第50次調査T-1・2平面図

 $SD-3\cdot 4$ 調査区南隅において東西方向に流れる溝 $SD-3\cdot 4$ を検出した。検出幅約50cmで1.5 mほどの間隔をおいて開削されている。灰褐色砂土の堆積が見られた。

風倒木痕1~4 調査区中央及び南西側で風倒木痕を検出した。暗褐色粘質土の堆積がみられた。

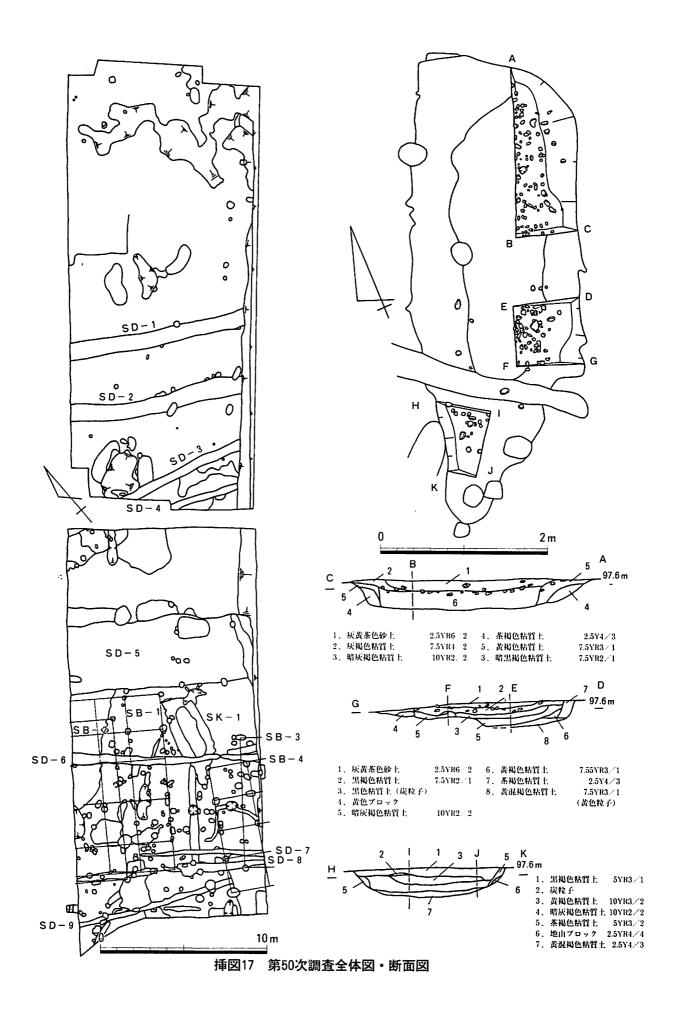
T-1ではこの他、弥生時代後期と考えている暗黒褐色粘質土の柱穴を幾つか検出しているが、建物等構造物を想定するには至らなかった。

T-2 T-1 に続いて南西部には旧河道があり約10m幅で遺構が検出された。

SD-5 調査区中央でトレンチに直交する方向で溝を検出した。検出幅約4 mを測り、灰茶褐色砂礫層の堆積が見られた。この溝は既往調査の成果から弥生後期と考えられ、同時期のSD-9と平行し直線的に西流するものである。その右岸側にはオーバーフローした水が運んだと見られる灰白色細砂が広く堆積していた。左岸西側にも明灰白色細砂の堆積がみられたが、これは中世の柱穴を覆っており、その廃絶以降に堆積したものであろう。

SD-6 SD-5 に平行して検出幅50cmの溝を検出した。中世の掘立柱建物を切っており、その廃絶以降の開削時期が推定される。

SD-7 SD-8 を切って、SD-6 に平行して西流する溝を検出した。幅20cmほどの細い溝で、調査区中央で途切れている。SD-6 と同じく灰褐色砂含粘質土の堆積がみられ、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

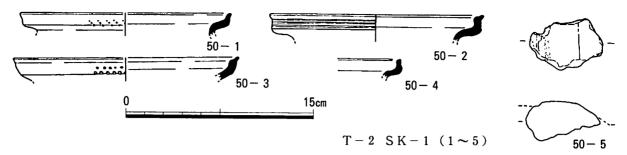


-30 -

- SD-8 調査区南東部でL字状の溝を検出した。SB-1の手前で屈曲することから中世の屋敷内の区画溝あるいは雨落ち溝と考えられる。検出幅約50cmを測り灰褐色砂土の堆積がみられた。
- SD-9 調査区南隅において東西方向に延びる溝を検出した。黒褐色粘質土の堆積がみられ既往調査の結果(28次調査)から弥生時代後期の溝であることがわかっている。検出幅は30cmと細いが、西側延長部では幅1m、深さ70cmを測り、断面形も深い逆台形を呈す。80m程直線的に西流した後、屈曲して南流し90m程直線的にのび、さらに屈曲し西流する。伊勢遺跡の南西側をクランク状に四角く区画する溝である。弥生後期の明確な遺構が伴わず、性格等は不明である。
- SB-1 調査区南西側でその一部を検出した。5間×3間以上の総柱式の建物で、一辺10.7mを測る。柱穴には灰褐色粘質土の堆積がみられ、方形の掘り方を呈す。
- SB-2 SB-2に重なった状態でその一部を検出した。5間×2間以上の建物で、一辺9.8mを 測る。柱穴の平面形は方形で、明灰褐色粘質土の堆積が見られた。
- SB-3 調査区南東隅においてその一部を検出した。建物の方位は $SB-1 \cdot 2$ に平行する。 4間 $\times 1$ 間以上の規模で一辺 8 mを測る。柱穴は方形あるいは円形で SB-2 と同じ埋土を持つ。
- SB-4 SB-3 に重なった状態で南東隅においてその一部を検出した。 10° ほど西側に振っていて時期差があると考えられる。一辺7.6mを測り、4 間×1 間以上の規模を有する。柱穴は円形でSB-1 と似た埋土をもつ。
- 柵 1 調査区南西側の中世の柱穴群のほかに、黒褐色粘質土の埋土を持つ弥生後期の柱穴列を確認した。東西方向に直線的にのびている。柱穴間の距離は約2mである。
- SK-1 調査区中央において長楕円形の土壌を検出した。長径5.5m、短径2mを測る。検出面で3~5cm程の川原石が水平に敷き詰められていた。1/4程掘削を行った結果、深さ50cmほどの逆台形の断面形を呈すことがわかった。黒褐色粘質土の堆積がみられた。同遺構からは1から5の遺物が出土した。1~4は受口状口縁襲の口縁部である。1は短く立ち上がる第2口縁部に特徴を持ち外面に左上がりの列点文が加えられる。2は水平に開く第1口縁から垂直に立ち上がる第2口縁からなる。外面に櫛描直線文が施される。形態的には野洲川流域の典型的な甕といえる。3は口縁部の屈曲が甘く、外上方へ短く立ち上がる第2口縁を持つ。外面顎部に列点文が加えられる。4は水平に開く第1口縁部から屈曲し垂直に立ち上がる第2口縁部からなる。端部は丸く収められる。5は用途不明の土製品で、板状に剥離したものである。以上の出土土器から弥生後期後葉から末にかけての遺構と考えられる。

3 調査成果のまとめ

今回の調査では、以下の事実関係を確認した。①調査対象地の南東部には栗太郡条里に沿って北東から南西方向にのびる幅15m以上の旧河道状の落ち込み(堀あるいは区画溝の可能性もある)があり、古代末から中世初頭の遺構を破壊している。②調査区南西部には平安末~室町時代(12世紀後半から14世紀半ば)にかけて堀立柱建物群が営まれている。③中世の建物は比較的規模が大きく、区画溝を伴って屋敷地を構成している。④奈良~平安時代にかけて東西方向に流れる溝が4条検出されているが、阿村町字上番田から伊勢町字南東浦にかけて、南側にむかって地形的に傾斜しており、その落ち際にそって東西方向に溝が開削されていた。⑤弥生時代後期の溝も同様であり、規模の大きいSD-5も地形に沿って直線的に延びる。⑥SD-5に沿ってクランク状にSD-9が掘削されており一辺90m程の方形の区画を形成している。⑦区画内の遺構は明確ではないが土壌SK-1等若干の遺構が存在する。⑧中世の建物群に重なって弥生時代の東西方向に延びる柱列があり、今後注意を要する。



插図18 伊勢遺跡50次調査出土遺物

今回の調査地は、第48次確認調査地点に隣接する地域であることから、重要な遺構が検出されるのではないかとみられていたが、明確な弥生時代の遺構は一部を除いて検出されなかった。伊勢遺跡中心部の方形区画南側前庭部分がこの地域に想定されるが、構造物を伴わない広場としての意義をもつのかもしれない。

第6節 第51次調査の成果

1 調査に至る経過

平成4年9月に発見された大型建物SB-1はその後、周辺部の調査成果をふまえて検討した結果、 二重の柵によって方形に区画された空間に4棟の建物が整然と配置されていた事が判明した。SB-1はそのなかでも主殿と呼ぶべき中心的な建物と考えられるが、その東側の状況は不明であった。

SB-1の東側に隣接する伊勢町字中東浦79-1番地の水田地について、地権者である伊勢町在住の北田俊夫氏の承諾を得て確認調査を実施した。確認調査では、未調査地域である方形区画東側の遺構の広がりを把握することに努めた。

2 検出された遺構

今回の調査地点はSB-1の東側隣接地にあたり、方形区画東側の状況が判明するものと期待された。しかし、予想に反して、第50次調査で検出された旧河道が直線的に延びることが判明した。弥生時代の遺構は旧河道に切られており、中心部の実体の解明にはつながらなかった。

調査は耕作土・床土を除去し、厚さ約15cmの灰黄色砂土(旧耕作土・床土)を掘削した後、黄色シルト上面で遺構検出を行った。

旧河道 調査区のほぼ全体で栗太郡地割りに沿って南北方向にのびる旧河道を検出した。幅4 m以上の川とその肩部を35 m以上にわたり確認した。旧河道の北西部には地山である黄色シルトの存在を幅1.5 mにわたり確認した。旧河道肩近くには明黒褐色粘質土の帯状の堆積(幅約70~120 cm)が認められ、中央部には灰黄色砂含粘質土の堆積がみられた。旧河道上面には近世の耕作痕が見られた。旧河道肩部を一部掘削したが、地山を抉り込むように垂直に近く落ち込んでいた。

地山である黄色シルト上面では暗黒褐色粘質上が充填された径60cm程の柱穴が検出されている。弥 生時代後期の遺構と考えられるが、旧河道肩部の地山面に点々と検出されており、弥生時代の遺構が 同地点にも広がっていたことが推測される。

調査区西側には現在の水路を開削する際の攪乱がみられた。

3 調査成果のまとめ

今回の調査で検出された旧河道は、第50次調査地点から100mほど北東部の地点にあたり、ほぼ直線

的にのびていることが確実になった。旧河道状 遺構の深さや幅については不明であるが、肩口 が急激に落ち込む状況からも大規模なものと考 えてよい。現在の伊勢町と阿村町、そして野尻 町とを区画する状況でもあることから、古代の 坪境であった可能性も残る。規模・広がりを確 認する必要があるが、伊勢町側では室町時代から戦国時代にかけての建物群も多く検出されて いることから、城郭あるいは館のまわりを囲む 施設でもある可能性もあり、今後注意を要する。

また、その肩部では弥生時代の柱穴が検出されており、遺構が広がっていたことが推定されるが、方形区画の東側隣接地の構造を明らかにすることはできなかった。確認調査は、平成10年11月2日~同11月28日の期間実施した。

調査期間中、11月15日には伊勢町自治会を中心とする市民約100名の参加を得て、伊勢遺跡の見学会と発掘体験会を実施した。伊勢遺跡方形区画の広がりを現地見学するとともに、表土掘削・遺構検出作業の体験を行っていただいた。合わせて、確認調査の目的と意義について説明に努めた。

第7節 第52次調査の成果

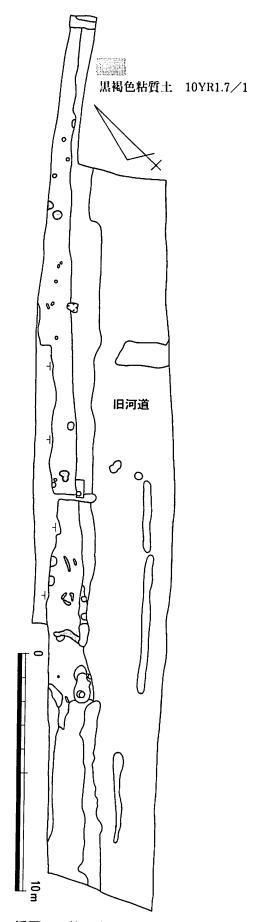
1 調査に至る経過

第51次調査で期待された方形区画東側の情報については、旧河道状遺構の存在によって得ることができなかった。また、その規模等が不明であったため、第51次調査地に隣接する阿村町字大洲156番地の水田地について、阿村町在住の野々逸夫氏の承諾を得て確認調査を実施した。確認調査は平成10年11月20日から同12月25日までの期間実施した。

2 検出した遺構と出土遺物

調査地西側半分は野菜の栽培が行われていたため、東側部分の調査となった。耕作土・床土直下の黄色シルト上面で遺構検出を行った。遺構検出面は平均標高98.3mであった。

SH-1 調査区南隅においてその一部を検出



挿図19 第51次調査全体図

した。一辺4.5mを測る方形住居である。SH-2を切っており、茶褐色粘質土の堆積が見られた。SH-2 SH-1・SD-2にきられ、その一部を検出した。かなり削平されているとみられ、切っているSD-1の輪郭が住居床面で捉えることができた。一辺5.2mを測る方形プランの竪穴住居である。平面検出時に弥生土器6が出土した。壺底部とみられ、やや突出する底部外面に刷毛が観察される。

SH-3 調査区中央においてSB-10を切った状態で検出した。4.2m×4.8mを測る方形プランの竪穴住居である。暗黒褐色粘質土の堆積がみられた。SB-10の確認のため一部を掘削したが、残存壁高は15cmを測った。掘削の際、SH-3の埋土から4・5の遺物が出土したほか、平面検出時に8が出土した。4は突出する壺底部で、外面に指頭による押圧が加えられているほか、内外面に目の細かい刷毛調整が加えられている。5は赤褐色を呈する甕の体部下半の破片である。外面に右上がりの粗い叩き目が観察される。8は小型の高坏脚中部で、円筒状を呈する。脚は中実で、外面に刷毛調整が観察される。8は後期中葉の形態的特徴をもつが、5などは後期後半から庄内式併行期の遺物と推測される。

SH-4 調査区東側でその一部を検出した。一辺7.4mを測る方形プランの竪穴住居で、黒褐色粘質土の堆積がみられた。SB-10が切られており、SH-2の造営軸にほぼ一致する。平面検出の際、弥生土器7が出土している。器台体部で、中空部が広く円筒状を呈す。内面に削り痕を残す。

SH-5 調査区北東隅においてその一部を検出した。一辺 5 m以上の方形プランの竪穴住居で、暗黒褐色粘質土の堆積がみられた。検出状況はやや不整な方形であるが、北壁軸は SH-3に一致する。SH-6 SH-2を切ってL字状に幅10cmほどの滞が検出されている。SH-4の手前に小溝が検出されており、周壁溝の一部と考えると一辺 6 mを測る方形プランの竪穴住居が復元される。このような竪穴住居の存在を考えると、弥生後期の遺構面がかなり削平をうけていると考えられ、消失した柱穴や溝等が多いことを想定する必要がある。

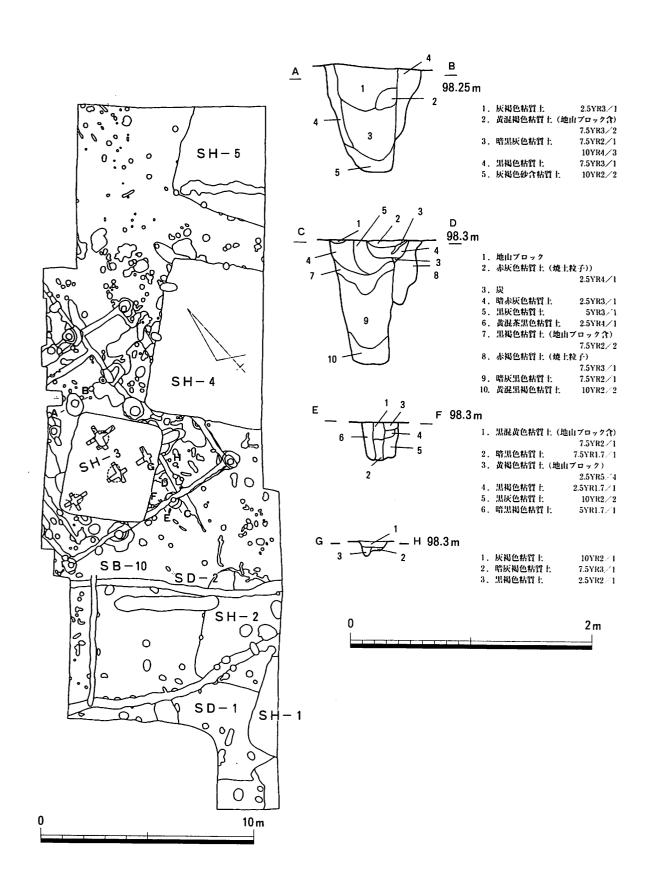
SD-1 調査区南側で東西方向に弧を描いて延びる溝である。茶褐色粘質土の堆積がみられ、SH-2 に切られている。調査区西隅においてやや屈曲し、西流する。幅50cmを測り、SB-10に平行すること、竪穴以前の遺構であることから大型建物 SB-10に併存する遺構の可能性がある。

SD-2 調査区中央においてトレンチに直交する溝を検出した。SH-2を切っており灰褐色粘質 土の堆積がみられることなどから、弥生時代以降の遺構と考えられる。幅30cm程で、柱穴等も切って 開削されている。

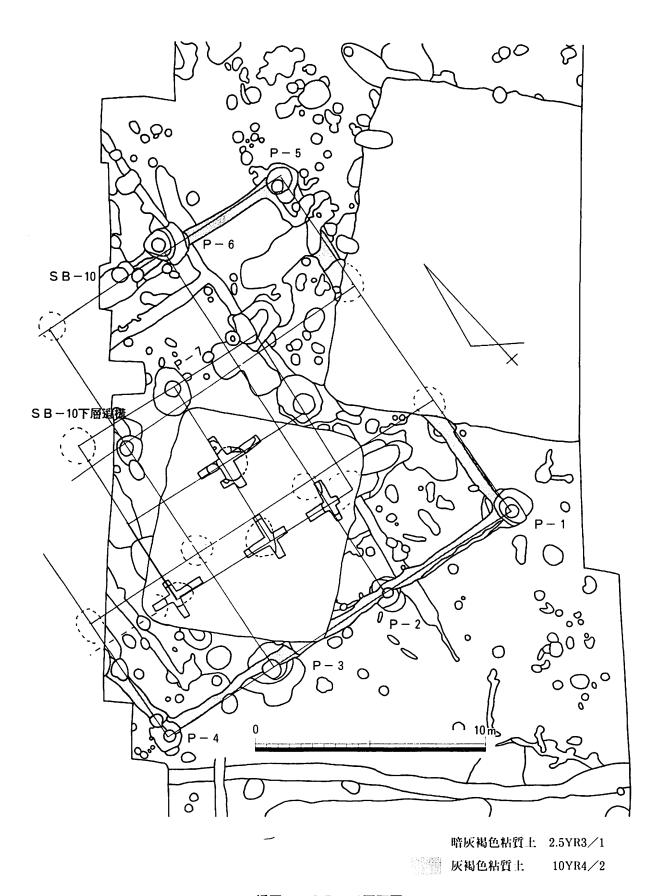
SB-10関連遺構

SB-10 調査区中央において 3 間× 3 間(9 m× 9 m)の床面積81 ㎡を測る大型建物を検出した。建物の北西部分は調査地外にある。柱穴の配置から総柱式建物の可能性が高い。この建物の特徴は布掘り状の溝を持ち、柱穴間をつなぎ四周していると考えられる。南辺中央の溝を一部断ち割り断面を観察した結果幅25cm、深さ20cmの小規模な溝であることがわかった。また、溝の外側に杭状の鋭く打ち込んだ痕跡がみられ、平面でも溝の外側を巡っていることが観察されることから、板塀状の施設を柱間に巡らせていたことが想定された。柱掘り方と周溝の関係をみると、柱穴をまず掘削し柱が据えられ、その上で溝が掘削されていることがわかる。板壁が想定される溝の外側のラインは柱根痕の中心間をつなぐ軸線に一致する。柱穴掘り方の周辺の土をみると、同心円上に異なる土質の堆積がみられるが、柱の補修を行ったのであろうか。あるいは第48次調査の北棟持柱のように、版築状に柱穴掘り方を固めた際の平面上の「見かけ」によるものであろうか。

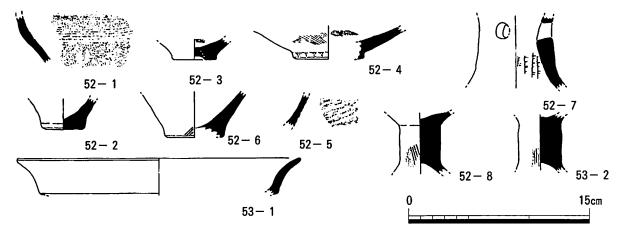
柱穴の掘り方の直径は80~120cm程あり、概ね平面形は円形である。柱根痕は25~40cmあり独立棟



挿図20 第52次調査全体図・断面図



挿図21 SB-10平面図



SB-10、P-2 (1・2)、SB-10下層遺構P-7 (3)、SH-2 (6)、SH-3 (4・5・8)、SH-4 (7) SD-1上層 (53-1・2)

插図22 52·53次調査出土遺物

持柱建物に使用された柱程の大きさであったと推定される。断ち割りを行ったP-2の断面の観察でも45cmほどと推測される。P-2からは1・2の土器が出土している。やや大型の受口状口縁襲の肩部で、直線文と植物質の茎を束ねた工具による列点文が加えられている。黄燈色の胎土で、在地の土器とはみられない。施文パターンや頸部の立ち上がりからすると後期中葉に通有な土器といえる。2は小型の壺底部とみられる。

SB-10下層遺構 SB-10の下層には井桁状の溝と柱穴が存在する。中央の南北溝は総延長13.2 m にわたって検出したが、この溝はSB-10の南北辺の溝に切られており、SB-10以前の遺構と考えられる。長方形状に溝で囲まれた範囲は南北6.5 m、東西5.3 mの規模であった。南北方向の長い溝上には2.3 mの間隔で 4 つの柱が並び、東西方向にも 4 つの柱穴が並ぶ。中柱も南北方向の柱穴の延長上に 6 個検出されており、2 間×2 間以上の大型建物が S B-10に先行して営まれていた可能性がある。仮に 3 間とすると床面積は45 mの総柱式の建物が復元される。P - 7 からは弥生土器 3 が出土している。やや突出するドーナツ状の上げ底で後期の土器とみられる。

いずれにしても、この地点には総柱式の特異な柱穴配置と布掘り風の溝をもつ建物があり、同一地点で立て替えられていた蓋然性が高い。

この他に竪穴住居に切られた柱穴等を多数検出しているが、構造物等を想定するには至らなかった。

3 調査成果のまとめ

今回の調査では、大型建物SB-10をはじめ多数の遺構を検出した。概ね、大型建物や柱穴群は弥生後期後半から古墳時代初頭の竪穴住居群(SH-1~5)に切られており、それ以前に営まれていた遺構と考えることができる。竪穴住居には7mを越える大型住居、5m前後の中型の住居、4m前後の小型住居がみられる点で46次調査の成果と共通する。また、伊勢遺跡中心部では大型建物が先行して営まれ、弥生後期後半から古墳時代前期の竪穴住居に切られるという傾向がみられる。

SB-10は21次調査で発見されたSB-1より東側32mの地点にあたり、ほぼ平行する軸線上にある。方形区画内の大型建物群とSB-10及び先行建物が同時期に建っていた可能性が高い。さらに、方形区画内の建物群と本調査地点の建物の柱穴配置は全く異なることから、違う機能をもつ建物群によって伊勢遺跡中心部が構成されていたと考えることができる。

今回の調査成果については平成10年12月19日に午前中地元説明会を開催し、約40名の阿村町・伊勢

町の方々の参加をえて実施した。午後からは一般市民を対象に現地説明会を開催した。約300名の見 学者が訪れた。

平成10年11月30日には阿村町子供会を迎え、伊勢遺跡の見学会と体験学習会を実施した。父兄も合わせて約20人の参加があった。

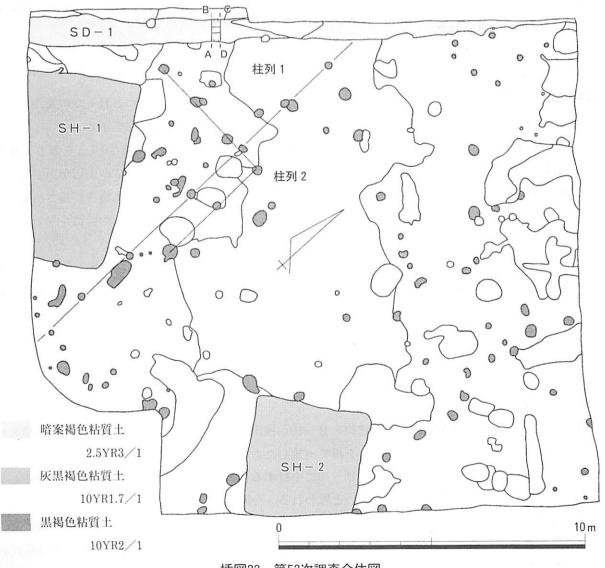
第8節 第53次調査の成果

1 調査に至る経過

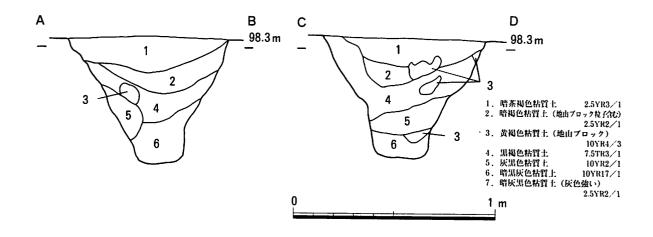
第52次調査によって大型建物SB-10がSB-1の東側延長上で検出されたのを受けて県教委との協議の結果、更に東側の遺構状況について確認する必要があると判断された。これらの建物群が東西方向の直線上に並んで検出されたためである。そこで第52次地点に隣接する阿村町字大洲157-1番地の水田地について、阿村町在住の地権者である今井耕二氏の承諾を得て確認調査を実施する運びとなった。

2 検出した遺構

第52次調査地の東側隣接地について約250㎡を対象に調査を行った。耕作土・床土直下の黄色シル



挿図23 第53次調査全体図



插図24 SD-1断面図

ト上面において遺構検出を行った。検出面の平均標高は98.35mであった。調査地の中央には暗黄色シルトの帯状の堆積が見られたが、地山の汚れで遺構とはみられなかった。

SH-1 調査地南西部でその一部を検出した。一辺6.1 mを測る方形プランの竪穴住居で、暗灰褐色粘質土の堆積が見られた。

SH-2 調査地東隅中央において検出した。 $3.7m \times 4m$ を測る方形プランの竪穴住居でSH-1 と同じ暗灰褐色粘質土の堆積がみられた。

SH-5 調査地西隅においてその一部を検出した。第52次地点で検出された SH-5 の東辺のコーナーを一部検出した。 SD-1 を切っていて、 $SH-1 \cdot 2$ と同じ建物軸方位を示す。

SD-1 調査区北西壁に沿って直線的に延びる溝を検出した。幅約1m、深さ0.7mを測り、暗黒褐色粘質土の堆積がみられた。断面形は深い逆台形を呈す。溝の埋土より1、2の土器が出土した。1は高坏口縁部で短く外上方へ外反し端部は尖頭状に収める。内面に横方向の箆磨きが施される。2は小型の高坏脚中部で円筒状の脚中部をもち、中実である。1は後期後葉の形態的特徴を示し、2は後期中葉から後葉にかけての遺物と考えられる。

この他、黒褐色系粘質土と暗茶褐色系の粘質土が堆積した柱穴・土壙等が多数検出された。特にSH-1周辺には黒褐色粘質土が堆積した明確な柱穴が集中しており、構造物の存在が想定される。特に南北方向に延びる柱列1は2m間隔で直線上に並び、柵等の可能性がある。さらに柱列2は7つの柱穴がL字状に並び、掘立柱建物の存在を予想させる。しかし、調査面積が限られていることや、平面調査という限界もあり、規模・性格等を特定するには至らなかった。

3 調査成果のまとめ

今回の調査は第52次調査地点で大型建物SB-10が検出された事から、その東側延長部の遺構の広がりを確認するため地権者の理解・協力を得て実施したものである。当初想定していた大型建物等の構造物の存在を特定できなかったが、SB-10に平行する柱列等の存在を考えると、伊勢遺跡中心施設の東側の境界をこの地域に想定してよいと思われる。今回の調査では、後期後葉の竪穴住居群に平行する溝SD-1が確認されたことが重要である。南北方位を示す伊勢遺跡の大型建物群の廃絶後、現在の栗太郡条里に沿った方位をとる竪穴住居群がこの地域に多数営まれている。SD-1は年代的にも後期後葉のなかで捉えられる遺構であり、竪穴住居群を区画する施設である可能性が高い。その

規模の範囲確認は今後の課題であるが、同様の溝が18次調査で検出されており方形区画以後、大型竪穴住居群を方形に区画する溝の可能性がある。同様の溝は第50次調査で検出されたクランク状に延びる溝をあげることができる。伊勢遺跡では複数の地点で直線的に百mを越えてのびる溝によって方形に土地を区画し、四角く区切っていると考えられるが、規模や広がりの確認については今後の課題と言える。

確認調査は平成10年12月4日に開始し同12月25日までで終了した。その成果については12月19日に 52次調査の成果とともに現地説明会で見学して頂いた。

第9節 第54次調査の成果

1 調査に至る経過

平成10年11月、大東建託株式会社より伊勢町字南代516番地の水田地において共同住宅建設に先立ち、遺跡の有無について照会があった。同地域は伊勢遺跡の範囲内にあたり、開発にあたっては発掘調査が必要であること、さらに重要な遺構が検出される可能性もあり、事前に確認調査を実施する必要があると回答した。開発予定地は区画整理内にあり、水田面も現況の道路面から1m近く下がることや区画整理事業によって客土されている地域であることから、遺構面が現況の地表面よりさがった位置にあることが想定された。大東建託とその後協議を重ね、基礎工事の掘削深度が遺構面に及ばないよう指導するとともに、地権者である小田 宏氏の承諾をえて事前に確認調査を実施した。確認調査は、平成11年2月8日に開始し、同2月18日に終了した。調査終了後、開発によって遺構面が痛まない基礎深度であることを確認し、工事着工にあたって立会を行った。

2 検出した遺構

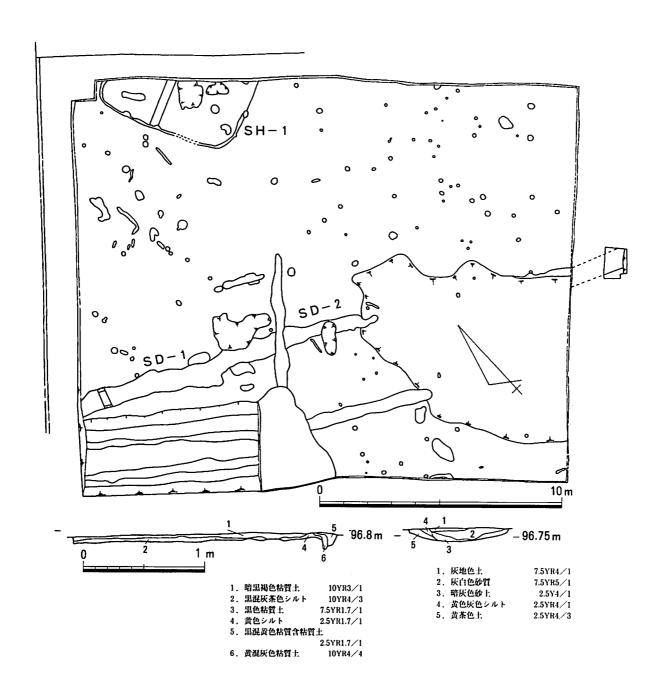
耕作土直下には平成7年度に完成した区画整理事業の際、客土された青灰色砂土が厚さ30cmほどありこれを除去したのち、黄色シルト上面で遺構検出を行った。調査地南側を中心に広い範囲で攪乱を受けていた。

- SH-1 調査区北隅において一辺6mを測る方形プランの竪穴住居を検出した。黒褐色粘質土の堆積がみられたが、削平を受けて周壁溝が辛うじて残存していた。弥生後期とみられる。
- SD-1 調査区南側において東西方向に延びる溝を検出した。攪乱によって東半部は失われていたが東隅にサブトレンチを入れたところ、区画整理道路隅において東端の位置を確認した。灰黄色砂土の堆積がみられた。位置関係から、48・50次調査で検出された奈良・平安時代の溝の延長部分にあたると考えられる。幅約1 mを測る。
- SD-2 SD-1 に平行してその南側で検出した。攪乱及びSX-1 に切られている。灰黄色砂土の堆積がみられた。
- SX-1 調査区西隅においてその一部を検出した。幅 3 m以上の落ち込みを 9 mにわたって検出した。深さ 1 mあり、南北方向から東西方向へと屈曲する溝と考えられるが、そのつながりは現在のところ不明である。SD-2 を切っており中世及びそれ以降の溝と考えられる。灰白色砂土の堆積がみられた。

この他、直径10~20cmほどの黒褐色・灰褐色粘土を埋土とする小ピットが多数検出されている。大型建物が検出された第44・48次調査地点から今回の地点にかけて、小ピットが多数みつかっているが、杭状の掘り方で性格等不明である。

3 調査成果のまとめ

本調査地点では竪穴住居が1棟検出された。大型建物SB-4の西側約15mの地点に営まれている。 SB-5の西側約15m地点でも第44次調査で竪穴住居が検出されている。大型建物と竪穴住居がほぼ軸をそろえて同時期に建っていたとすれば、大型建物の機能を補完する住居であったと考えられる。いずれにしても、同調査地点から以西は弥生後期の遺構が希薄となる傾向があり、集落中心部から外れる事がわかる。



挿図25 第54次調査全体図

第3章 出土遺物観察表

本報告分出土遺物について観察表で詳細を報告する。色調は標準土色帳によって記載した。なお時期決定に重要な役割をもつ受口状口縁甕については、頸部より外反する部分を第1口縁部、上方へ立ち上がる部分を第2口縁部と呼称し、説明を加えた。

次数	番号	出土地点	形式	法量 cm	形態的特徵	調整・文様	内外	色調		備考
伊勢遺跡 2次調査-1	1	C-T-1 P-A	高坏脚部	_	円筒状の脚中部。	中実部の内側底に円 板充填。	内外	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	10YR7/4 10YR7/4	栅列より出 士:
伊勢遺跡 2次調査-2	2	C-T-1 P-B	高坏脚中部	_	坏部と脚部の接合部。	円板充填法による坏 底部の整形。	内外	浅黄橙色 浅黄橙色	10YR8/4 10YR8/4	御列より出 土
大洲遺跡 3次調査-1	3	T-3 SB-7	器台体部	体部径 (6.9cm)	円筒状の体部。中空 部が広い。	調整は不明。	内外	灰白色 浅黄橙色	10YR8/2 10YR8/3	四方透かしか?
大洲遺跡 5次調査-1	4	T - 4 SB - 2 P - 1	受口状口縁 甕	口径(17.9cm)	第2日縁部は内頼し立ち上がり、 内斜する上端面を有する。	顎部に左上がり列点 文。	内外	黄橙色 橙色	7.5YR8/8 7.5YR7/6	大型建物柱 穴より出土
大洲遺跡 5次調査-2	5	SB-2 P-7	受口状口縁 甕	-	第2口縁部は外上方につま み上げ、円頭状におさめる	調整は不明。	内外	橙色 浅黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR8/3	大型建物柱 穴より出土
大洲遺跡 5 次調査 - 3	6	T-4 SB-2 P-7	疑下腹部	腹径 19.3cm	下腹部に貼付突帯を 有する。	突帯は横方向に中央分割し、縦方 向の刻目を加える。外面縦引毛。 突帯下節にフメ(爪)痕。	ł	灰黄褐色 暗灰黄色	10YR5/2 2.5YR5/2	大型建物柱 穴より出土
伊勢遺跡 21次調査	1	SB-1 P-4	高坏坏部	口径(25.6cm)	浅い坏部より外上方に外反する口 緑部をもつ。端部は丸くおさめる。	外面に縦方向のは箆 磨き。	内 外	黄橙色 黄橙色	7.5YR7/8 7.5YR7/8	
	2	SB-1 P-4	甕脚部	脚径 (9.5cm)	脚部と体部は分割形 成による。	外面に縦刷毛。	内外	灰白色 浅黄橙色	10YR8/2 7.5YR8/3	
	3	SB-1 P-6	広口壷	口径(27.0cm)	外上方に大きく外反する口縁部を有 する。端部は逆三角形状に垂下する。	口縁部内面に横刷毛。口縁部には 円形浮文 (竹管文を加える。)	内外	浅黄橙色 浅黄橙色	10YR8/4 7.5YR8/6	
	4	SB-1 P-6	壷体部	_	大型壷の下腹部の破 片。	内面に指頭痕。	内外	灰褐色 にぶい褐色	7.5YR4/2 7.5YR5/4	生駒西麓産
	5	SB-1 P-6	高坏坏部	口径(27.9cm)	が第2日確認の視点に強い機を形成。違 第1回面をもち、下旋節に配呼する。	内外面ともに縦方向 の箆磨き。	内外	浅黄橙色 浅黄橙色	7.5YR8/4 10YR8/4	
	6	SB-1 P-6	高坏脚中部	_	円筒状の脚中部。 円板充填法。	外面に縦方向の箆磨 き。内面にしばり痕。	内外	橙色 橙色	5YR7/6 5YR7/8	三方透かし
	7	SB-1 P-6	高坏脚部	脚径(12.3cm)	円錐状の脚部。端部は面 をもち下端部に肥厚する。	外面は縦方向の箆磨 き。内面にしぼり痕。	内外	にぶい橙色 橙色 : 黒斑	7.5YR7/4 7.5YR7/6	三方透かし
	8	SB-1 P-6	受口状口绿	口径(15.9cm)	第1日縁部は水平にのび、第2日 縁部はや中頃し立ち上がる。上 始部は四面を形皮。	外下端に縦方向の列 点文。	t t	浅黄橙色 灰褐色	10YR8/3 7.5YR4/2	
	9	SB-1 P-6	受口状口緑 甕	口径(17.7cm)	第21縁部は直立し、端部は内斜す る凹面を形成。 第1日縁と頸部 接点内面に強い枝を形成。	口縁部外下半に右上 がり列点文。		灰白色 浅黄橙色	7.5YR8/2 10YR8/3	
	10	SB-1 P-6	器台口緑部	口径(14.0cm)	口縁部は逆三角形に 垂下する。	口縁部外面に縦方向 の列点文。		にぶい黄檀色 黄檀色	7.5YR7/4 7.5YR7/8	
	11	SB-1 P-10	長頸壶	口径(15.1cm)	円筒状の頸部をもち、 上端部は短く外反す る。	類部外面は繰方向の尉毛の上、臣 磨き。日縁部に竹音文。頭部付け 根に三角形の刺突文。		橙色 橙色	7.5YR6/8 7.5YR6/8	
	12	SB-1 P-10	受口壷	口径 (13.1cm)	外元する録至上半から、ゆるやかに第1 日縁正は移行し、第2日縁正は外上方に 立ち上がる。始近は外方につまる出す。	口縁部は右上がり列点文。 頚部に櫛描直線文。 頚部外 面に縦関毛。内面に横関毛。		にぶい黄色 浅黄橙色	2.5Y6/3 10YR8/4	
	13	SB-1 P-10	受口壺	口径 10.0cm	短い景部よりゆるやかに記さし、安日代 の日報を形成。上端部は丸くおさめる。	頸部内面に横刷毛。		浅黄橙色 橙色	7.5YR8/6 7.5YR7/6	
	14	S B - 1 P - 10	受口状口縁	口径(14.9cm)	第1日命記は水平にひらき、第2日録記 は短く立ち上がる。遊話は外方につまみ 出す。製部に右上がり列点文。	頸部内面に横刷毛。		にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/3	

次数	番号	出土地点	形式	法肌 cm	形態的特徵	調整・文様	内外	色調		備考
	15	SB-1 P-10	受口鉢	口径 14.8cm	頭部立ち上がりは短く、第1日縁部 は外上方にひらき、第2日縁部は短 く直立する。内傾する凹面を形成	口録部に右上がり列点文。 肩部に櫛描直線文・右上が り列点文。	内外	灰白色 灰白色	7.5YR8/2 7.5YR8/1	
	16	SB-1 P-10	受口状口縁 塑	口径(13.1㎝)	口縁部の配曲が甘く、第2口縁部は短く 立ち上がる。上端部は尖頭状におさめる	調整は不明。	内外	浅黄橙色 浅黄橙色	7.5YR8/6 7.5YR8/6	
	17	SB-1 P-10	受口状口縁 歴	口径(13.8㎝)	官の張る体語で、外上方に甘く居合する 受口状口縁を形成、端部は丸くおさめる。	調整は不明。	内外	浅黄橙色 浅黄橙色	10YR8/3 7.5YR8/3	
	18	SB-1 P-10	塑	口径 13.4cm 腹径 17.7cm	球形の体部をもち、くの字状に外 反する口縁部を有する。 電部は丸 くおさめ、内側に配厚する。	内面につなぎ痕・指 頭痕が残る。	内外	にぶい橙色 橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/6	
	19	SB-1 P-10	塑 底部	底径 3.9cm	突出しない小さな平 底。	外面経刷毛。内面につな ぎ痕・指頭痕が残る。	内外外	浅黄橙色 にぶい橙色 : 黒斑	7.5R8/6 7.5YR6/4	
	20	SB-1 P-10	高坏坏部	口径 23.2㎝	浅い坏部から短く外反する口縁 部がつく。端部は尖頭状におさ める。円筒状の胸中部。	脚中部に櫛描直線文 二帯。	内外	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	10YR7/2 10YR7/4	
	21	SB-1 P-10	高坏脚中部	_	円錐状の脚中部。	円板充填法。 樹猫直線文四帯、 刻 目文三帯を交互に加える。	内外	橙色 橙色	7.5YR7/6 7.5YR6/6	
	22	SB-1 P-10	壶底部	底径 4.5cm	やや突出する平底。	外面は疑問毛ののち殺方向の箆磨 き。内面は箆削りの後横尉毛。	内外	灰白色 にぶい黄橙色	10YR7/1 10YR7/4	
	23	SB-1 P-8	塑 底部	底径 3.9cm	突出しない半弧状の あげ底。	外面縦刷毛。	内外外	浅黄橙色 灰黄橙色 : 黒斑	10YR8/3 10YR5/2	
	24	SB-1 P-8	高坏脚中部	-	円筒状の脚中部。	坏部内外面及び資外面は終方向 の管磨き。脚内面に絞り痕。	内外	褐灰色 明黄褐色	10YR6/1 10YR7/6	三方透かり
	25	SB-1 P-11	受口状口绿	口径(15.3cm)	長く立ち上がる頭塔をもち、水平に ひらく第1日縁部から直立する第2 日縁路をもつ。端部は内斜する凹面。	口縁下半に右上がり 列点文。頸部外面に 縦刷毛。	内外	浅黄橙色 浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/4	
	26	SB-1 P-11	受口状口绿	口径(12.8㎝)	水平にひらく第1口録から、 短く立ち上がる第2口録部 がつく。内斜する凹端面。	顎部に縦方向の列点 文。	内外	浅黄橙色 浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	
	27	SB-1 P-11	塾 底部	底径(3.8cm)	やや突出する平底。	外面縦刷毛。内面に横刷 毛、指頭痕が残る。	内外外	にぶい黄橙色 橙色 : 黒斑	10YR6/4 7.5YR7/6	
	28	SH-1 P-2	鉢体部	腹径 (19.9cm)	扁平な体部。	夏部に増生直線文、横方向におる列点 文。下腹部に突帯をもち、中央分割。	内外外	にぶい橙色 浅黄橙色 : 黒斑	7/5YR7/4 7.5YR8/6	
	29	SH-2	直口壺	口径 (15.7㎝)	外上方に直線的にのびる口根部。外針す る場面を形成し、内側に配厚する	内外面とも調整は不 明。	内外	灰白色 灰白色	10YR8/2 10YR8/2	
	30	SH-2	受口状口縁	口径(14.6㎝)	外反する第1日様に、外上方に甘く配合 しのびる第2日様がつく、歳部は外斜す る日酒を形成して外下方につまみ出す。	外下方につまみ出す。 端部外面に指頭痕。	内外外	浅黄橙色 浅黄橙色 : 黒斑	10YR8/3 10YR8/4	
	31	SH-3 上間	高坏脚裾部	脚径(18.7㎝)	裾部はゆるやかに大きく開 脚し、端部は丸くおさめる	内外面とも調整は不 明。	内外	橙色 橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/6	
	32	SK-1	亚口 緑	口径(18.7㎝)	外上方に短くのびる預部より、内湾景味 に立ち上がる長い日禄部をもつ。上端部 は水平な酒をもち外端部は配厚する。	内外面とも横刷毛。	内外	にぶい橙色 浅黄橙色	7.5YR7/3 7.5YR8/3	山陰系か
	33	SK-1	直口壺	口径(18.5㎝)	外上方に直線的にひらく口縁部 をもつ。外針する面をもち、上 端部をややつまみあげる。	調整は不明。	内外	にぶい黄橙色 浅黄橙色	10YR7/3 10YR8/3	
	34	SK-1	壷	口径(18.9㎝)	外上方に内湾気味に立ち上 がる。外面に屈曲し段を形 成する。内路部に肥厚する	頸部内面に箆削り。 口縁部下端に擬凹線 文。	内外	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/3	山陰系か
	35	SK-1	並底部	底径 7.5cm	突出するドーナツ底。	外面は殺靭毛の後横方向の箆磨 き。内面はクモの巣状の靭毛。	内外外	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色 : 黒斑	10YR7/2 10YR7/2	
	36	SK-1	受口状口绿斑	口径(12.9㎝)	外上方にのびる第一口縁より屈曲 し短く立ち上がる第二口縁よりな る。 雑部はやや外方へつまみ出す。	口縁から肩部は無文。 横ナデによる調整。	内外	浅黄橙色 浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/4	

次数	番号	出土地点	形式	法社 cm	形態的特徵	調整・文様	内外	色調		備考
	37	SK-1	受口状口縁 班	口径(13.8cm)	顎部の屈曲が甘く、端部 を外方へつまみ出す。	肩部に横刷毛。		浅黄橙色 浅黄橙色	10YR8/4 10YR8/3	
	38	S K – 1	受口状口縁 塑	口径(12.9㎝)	第一日縁部から第三日縁部への 記曲は甘く短い。上端面は凹面 をなしややつまみ出す。	肩部に指頭痕。無文。		浅黄橙色 浅黄橙色	10YR8/3 10YR8/3	
	39	SK-1	受口状口縁 塑	口径(11.9㎝)	屈曲が甘く、端部は 尖頭状におさめる。	内面に板状工具の痕。 無文。		にぶい橙色 にぶい橙色	5YR7/4 5YR7/4	
伊勢遺跡 46次調査-1	1	T-1 SH-5	童底部	底径 4.0cm	突出するドーナツ底。	底部外面に指頭痕。	内外	灰白色 橙色	10YR8/2 7.5YR7/6	
46次調査 — 2	2	T-1 SH-8	受口状口縁 班	口径(15.9cm)	外上方に屈曲して伸び、端 部は外方にややつまみ出す。	口線部無文。 肩部に櫛描直線文か。	内 外	灰白色 灰白色	2.5YR8/2 2.5YR8/2	
46次調査 — 3	3	T - 2 S B - 3 P - 1	壺村部	頸部 (20.0cm) 祥	月の張る体部から、上方 に直線的に立ち上がる類 部。類部付根に貼付実帯。	肩部内面に指頭痕。	内外	褐色褐色	7.5YR4/4 7.5YR4/4	生駒西龍産胎士 をもつ大型の広 口壺とみられる。
46次調査-4	4	T - 2 SH - 1	二重口緑壷 か	頸部 径 (13.2cm)	直線的に上方にのびる類部より二 段に屈曲する口縁部を形成。	口縁部に櫛描波状文。	内外	浅黄橙色 橙色	7.5YR8/6 5YR7/6	
46次調査- 5	5	T-2 SH-1	高坏口緑部	口径 -	外上方に短く外反する口縁部。端 部は尖頭状におさめる。	調整は不明。	内外	橙色 橙色	5YR7/6 7.5YR7/6	
46次調査- 6	6	T - 2 S H - 1	受口状口縁 翌	口径(14.8cm)	外がに関く第一口縁至と上がに短く立ち といる第二口縁至よりなる。第三は不可	口縁顎部に左あがり 横列点文。	内外	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR5/3	
46次調査 - 7	7	T-2 SH-1	手焙りか	口径(18.0cm)	発耳さら上かりか短く、第一口発耳も短く外上方に開き、第二口経軍に移行する。	口緑部に一条の沈線 文。	内外	灰黄褐色 暗褐色	10YR6/2 10YR3/3	
46次調査-8	8	T - 2 SH - 1	塑	口径(18.9cm)	くの字状に外反する。器壁が薄 く端部は尖頭状におさめる。	横ナデ。	内 外	黑色 黑色	N2/ N2/	
伊勢遺跡 48次調査-1	1	SB-5 P-1	電 肩部	_	月の張る体部より内質気 味に立ち上がる頚部。	調整は不明。	内外	灰黄色 浅黄橙色	2.5Y6/2 10YR8/4	長頸壷か?
48次調査- 2	2	SB-5 P-1	受口状口縁 墾	_	肩部から体部にかけ て器壁が薄くなる。	肩部に懺描直線文・ 列点文。	内外	にぶい黄橙色 浅黄橙色	10YR6/4 10YR8/4	
48次調査 — 3	3	P-1	受口状口绿	口径 18.1cm	第一日縁延は外上方に開き、第二日 縁至は真立する。 塩至は外方へ大き くつまみ出し、四面を形成する。	口縁部に緩方向列点文・ 一条の沈線文。 肩部に 櫛 描直線文・縦方向列点文。	内外外外	にぶい黄橙色 浅黄橙色 : 黒斑	10YR6/4 10YR8/4 -	
伊勢遺跡 49次調査-1	1	T-1 SD-5	壷口緑部	口径(19.0cm)	短く外反する口縁部。端 部は円頭状におさめる。	調整は不明。	内外	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	7.5YR7/4 10YR7/3	
49次調査-2	2	T-1 SD-5	短頸壶	口径(16.8㎝)	外傾し、短く上方に立ち上かる。 端 部は面を形成し、外端部に肥厚する。	内面に横刷毛。	内外	にぶい黄橙色 浅黄橙色	10YR7/2 10YR8/3	
49次調査-3	3	T-1 SD-5	受口状口绿 甕	口径(17.6㎝)	第一は確認は大学に本受し、第1日確認 は真正する。 美国は若子のまみ出す。	口縁部に慎描波状文。	内外	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	10YR7/3 10YR7/2	
49次調査 - 4	4	T-1 SD-5	並底部	底径 4.0cm	突出しない平底。	内面に横方向刷毛。	内外外	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色 : 黒斑	10YR7/2 10YR7/2 -	外面に黒斑。
49次調査 - 5	5	T-1 SD-5	高坏脚中部	-	短い中央の円筒状の脚中 部よりゆるやかに開脚。	調整は不明。	内 外	浅黄橙色 浅黄橙色	7/5YR8/3 7.5YR8/3	三方透かし。
伊勢遺跡 50次調査-1	1	T - 2 S K - 1	受口状口縁	口径(16.8㎝)	外上方に直線的にのびる第一口 縁部より屈曲し、短く立ち上が る第二口縁よりなる。	左上がり列点文。	内外	浅黄橙色にぶい黄橙色	7.5YR8/4 10YR6/3	
50次調査 - 2	2	T - 2 S K - 1	受口状口縁	口径(16.9cm)	大学にひらく第1日縁回から、紀由し 直にする第2日縁回かりなる。第章は 株力につまる出し四面を形成する。	三条の櫛描直線文。	内外	灰黄褐色 灰黄褐色	10YR6/2 10YR6/2	
50次調在-3	3	T - 2 S K - 1	受口状口縁	口径(18.0cm)	口録部の屈曲が甘く、第二日 経部は外上方に立ち上がり、 内斜する凹面を形成する。	頸部に縦方向の二点 列点文。	1	褐灰色 灰白色	10YR4/1 10YR8/2	
50次調査-4	4	T-2 SK-1	受口状口绿 塑	_	水平につびる第一口は選より、中や内積 実践にさち出かる第三口様よりなる。	列点文。	内外	灰黄褐色 灰黄褐色	10YR6/2 10YR6/2	
50次調査 - 5	5	T - 2 S K - 1	上製品	_	上面に平端な面を有し、 内側に凹面を形成する。			明黄褐色	10YR7/6	

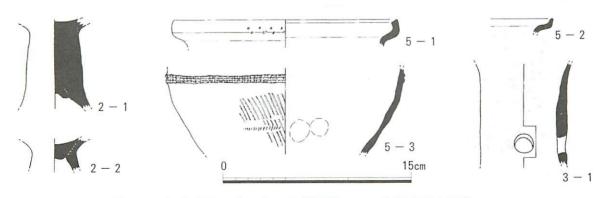
次数	番号	出土地点	形式	法量 cm	形態的特徵	調整・文様	内外	色調		備考
伊勢遺跡	1	SB-10	受口状口縁	_	器壁があつく、やや	肩部に直線文・列点文	内	黄橙色	10YR8/6	
52次調査-1	,	P – 2	塑刷部		大型の壁とみられる。	(竹管を束ねたもの)	外	明黄褐色	10YR7/6	
52次調査-2 2	,	SB-10 型底部	底径 2.9cm	やや突出する平底で、	調整は不明。	内	浅黄橙色	10YR8/4		
		P – 2	REALTON	ASIE 2.9Cm	小型品とみられる。	過22は小り。	外	浅黄橙色	10YR8/4	
52次調査-3 3	3	SB-10下唇迹構	壶底部	底径 3.5cm	やや突出するドーナ	district literature	内	橙色	5YR6/8	
02:XH4] EL 0	Ů	P – 7	近班Z (14)		ツ状のあげ底。 内面に横刷毛。	外	橙色	5YR6/8		
52次調査-4	4	SH-3	童底部	底径 4.9cm	短く突出する底部。	内外面ともに斜め方向の	内	黒褐色	2.5Y3/1	
02(A)#JEL 4	.,	311-3	班(以口)	AX12 4.500	位(大田)の広中。	剧毛。底部外面に指頭痕。	外	黒褐色	2.5Y3/1	
52次調査-5	5	SH-3	聖底部	_	底部にむかって器壁	外面に右上がりの叩	内	黒褐色	2.5Y3/1	V様式系の
02:XMIE 0	Ů	J11 0	BEITZUD		が厚くなる。	目。	外	赤褐色	5Y4/8	たたき甕。
52次調査-6	6	SH-2	難底部	底径 4.6cm	やや突出する底部。	外面刷毛目。	内	灰黄褐色	10YR6/2	
021// 844 11 0	Ľ	311 2	36,17,11)	ACE 4.00m	で (大田 9 の成品)。	外叫啊七日。	外	にぶい黄橙色	10YR6/3	
52次調査-7	7	SH-4	器台体部	_	中空部のやや広い器	内面に箆削り。(横	内	にぶい黄橙色	7.5YR7/4	
OZIXINGEL I	<u> </u>	511 4			台体部。	方向)	外	橙色	7.5YR7/6	三方透しか
52次調査-8	8	B SH-3	高坏脚中部	_	短い中実の円頭状の	N TOUT	内	浅黄橙色	10YR8/4	
ODINBULE O	Ľ	311 0	101~[-041-4-01		脚中部。	外而刷毛。	外	灰白色	10YR8/2	
伊勢遺跡	1	S D - 1	高坏坏部	口径 (23.7㎝)	大きく外反する口縁部	内面に横方向の箆磨	内	にぶい黄橙色	10YR6/4	
53次調査-1	_	上图	داتاءاهاها	11± (20.10Ⅲ)	で、尖頭状におさめる。	き。	外	浅黄橙色	7.5YR8/3	
53次調査-2	١,	2 SD-1 上居	高坏脚山部	- B	短い中実の脚中部。	外面に縦方向の箆磨	内	橙色	7.5YR7/6	
OOIAMEE 2	4					き。	外	淡赤橙色	2.5YR7/3	

第4章 調査成果のまとめ - 伊勢遺跡大型建物群の時期と変遷-

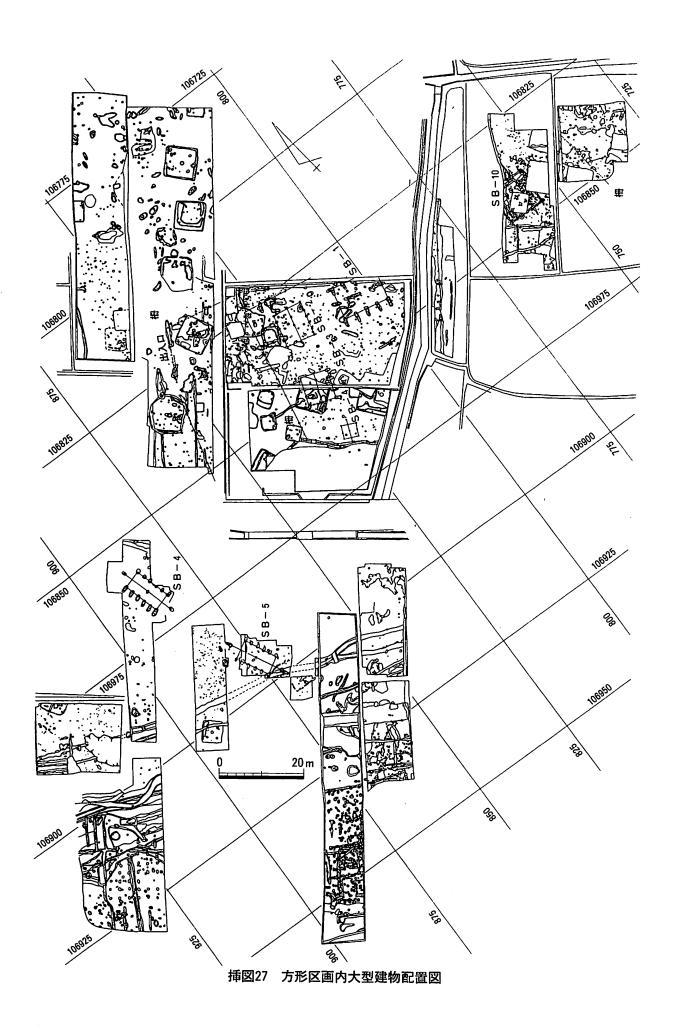
本報告分の確認調査によって次のことが判明した。①方形区画内の大型建物群が後期中葉末に衰退した後、後期新段階には多数の竪穴住居が営まれる。第46次調査によってSB - 3が竪穴住居に切られていることが確認されたが、方形区画内に後期後葉の竪穴住居が営まれていることからも想定される。②独立棟持柱付き大型建物SB-4の南側約18mの地点にほぼ同規模・同形式の建物が縦方向に配置されていたことが判明した。柱根には縄掛けの痕跡があった。出土土器から後期後葉段階の建物であることが判明した。③遺跡東半部には古墳時代から中世にかけての旧河道が幾つも存在したことが確認された。④方形区画内の大型建物SB-1の東側約32mの地点に3間×3間(9m×9m)床面積81㎡を測る大型建物が存在することが確認された。この建物は総柱式の建物で、下層に先行する総柱式の建物があり同地点において建て替えられていたことが判明した。さらに、この建物の東側で柵状の柱穴列があり、方形区画内及び中心部の施設が53次地点を限界とすることが想定された。以上のとおり、平成9・10年度の確認調査によって伊勢遺跡中心部において2棟以上の大型建物があらたに検出された。これらの大型建物は方形区画内の建物群とともに重要な役割をもっていたと考えられる。以下、大型建物の構成とその変遷を概括しまとめとしたい。

21次調査によって、方形区画内の大型建物群が後期前葉末~後期中葉でも古い段階に造営されたことが判明した。柱穴内から出土した土器から後期後葉には廃絶していたと考えられ、方形区画内には竪穴住居群が進出している。後期後葉の竪穴住居群には方形に巡る区画溝が伴っていると推定される。そしてSB-1・2とSB-3は建物軸に6°のずれがあり、方形区画内の建物群にも2時期あるものとみられる。しかし、後期中葉の時間幅のなかで収まるものと推定される。SB-1の東側約 $32\,\mathrm{m}$ の地点には楼観とみられる大型建物(SB-10)が検出されたが、この建物も建て替えられていることが判明しており、中心部の建物は土器形式からみて $2\,\mathrm{m}$ り間にでの時間幅をもっている。このことは伊勢遺跡出現の契機が中心部の建物群と密接に係わりをもち、一定の時間幅のなかで特定区画が機能し維持されていたことを示している。次にこれら中心部の建物群と周辺の大型建物・施設との関係を検討する。

伊勢遺跡 2 次調査では方形区画内の建物群に平行して柱穴列が検出されている。これらの柱穴からは $2-1 \cdot 2-2$ の弥生土器が検出されている。ともに高坏脚部であり、柱状部が円筒形を示す点や円盤充填による接合が観察され後期中葉の特徴をしめしている。これらの柱穴列はその配置や時期から方形区画の外側の柵と考えられる。 $SB-1 \cdot 2$ の西側延長部には出入り口とみられる空間があり、その両側の柵は二重に柱穴が配置される。方形区画内の建物群は二重の柵によって区画されていたと



插図26 伊勢遺跡 2 次調査・大洲遺跡 3 · 5 次調査出土遺物



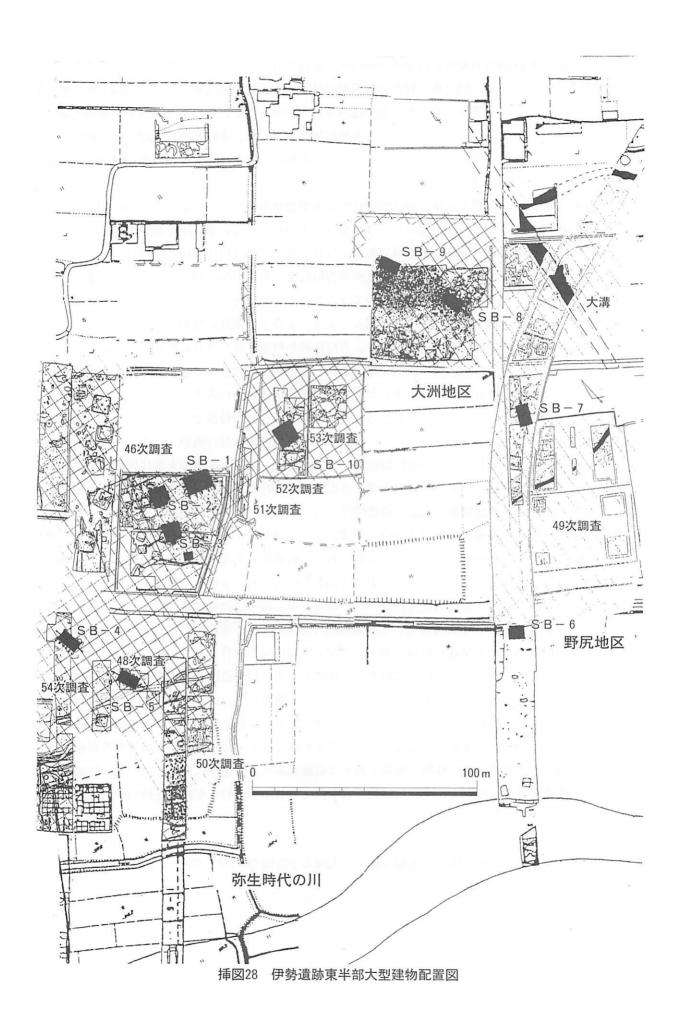
考えられる。方形区画内の東側には中世の旧河道が検出されており、左右対称形であるかどうか詳細は不明であった。しかし、旧河道の肩部には大型の柱穴がみられ、何らかの建物や施設があったと想定される。さらにその東側には正方形の大型建物SB-10が存在し、中心部を構成した建物と考えてよい。これらの大型建物は伊勢遺跡中心部の主要な施設とみられ、それぞれ柱穴配置や形式が異なり、違う機能をもつ建物群によって構成されていたことがわかる。次に特定区画の外側に検出されている大型建物群との関係を検討する。

伊勢遺跡大洲地区では過去3棟の独立棟持柱付き大型建物が見つかっており、その時期について出土土器から検討する。SB-7の柱穴からは器台3-1が出上している。中空部が大きく円筒状を呈するもので、後期中薬の特徴を示すものである。SB-9からは受口状口縁懇の口縁部(5-1・2)、下腹部(5-3)が出土している。5-1はやや内傾気味に立ち上がる口縁部の特徴を示す。5-2は上方へ短く立ち上がる口縁部で外方向へつまみ出す新しい要素はみられない。5-3は貼付け突帯に中央分割する凹線を加えたのち縦方向に刻んでおり、突帯の出現期の様相をしめしている。これらの遺物は後期中薬の形態的特徴を示しており、方形区画が機能・維持された時期に順次造営された建物群と考えてよい。次に方形区画の西側で検出された独立棟持柱付き大型建物SB-5の出土遺物を検討したい。棟持柱の柱穴掘方から出土した受口状口縁塑は外方向に大きくつまみだされており、後期後薬の特徴を示している。これは隣接するSB-4でも見られる特徴であり、この2棟の建物は同時期に存在した可能性が高い。しかし、この時期には中心部の建物群は廃絶し、そこには竪穴住居群が営まれていたと考えられる。中心部に展開した竪穴住居は一辺8mを測る大型住居群であることや、方形にめぐる区画溝が伴っており、後期中薬の方形区画に替わる施設群ともみられる。出土遺物からみてSB-4・5の大型建物群に対応する遺構はこれらの大型竪穴住居群と考えられる。

以上の検討から、伊勢遺跡の大型建物群の変遷について以下のようにまとめることができる。伊勢遺跡の出現はおそくとも後期中葉でも占い段階と考えられるが、出現契機となる遺構は方形区画内の大型建物及び楼観と考えられる。大洲地区第5次調査で検出された多数の柱穴群から想定される平地式建物群もまた同時に存在した可能性が高い。その後、中心部の建物群は建て替えられ維持されたことがわかるが、後期中葉の時間幅のなかで大洲地区の大型建物群が順次造営されたと考えられる。後期後葉には方形区画内の大型建物群は消滅し、大型の竪穴住居群に替わっている。この時期に対応する大型建物はSB-4・5の独立棟持柱付き大型建物である。伊勢遺跡では中心部の特定区画とその周囲に造営される独立棟持柱付き大型建物がセットとして機能していた点に特徴をもつと考えてよい。

伊勢遺跡は弥生後期中葉初頭に突然出現する大遺跡であるが、弥生後期末には急速に衰退している。 後期中~後半にかけて鉄や金属器の流通をとおして北近畿ルート・日本海ルートの重要性が指摘されているが (41)、伊勢遺跡はその時期に盛期を迎える遺跡である。古墳時代前夜、列島内の物流や交易をとおして近江が重要な役割をになっていたことが推定されるが、特異な内容を持つ伊勢遺跡がその中心的な位置を占めていたのではないか。

(註1)福永伸也 「邪馬台国から大和政権へ」大阪大学出版会 2001.10



図

版

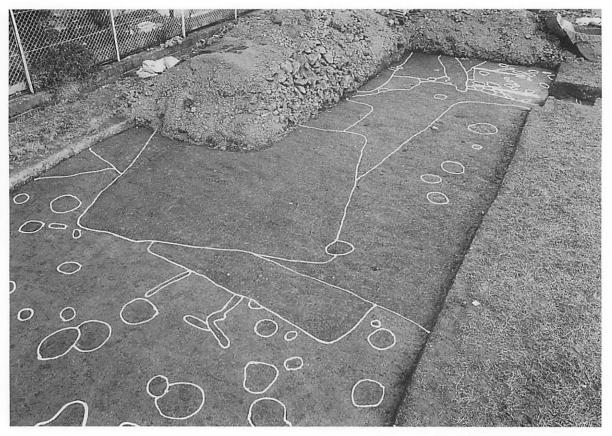


調査地全景(西から)



SB-1全景(南西から)

义 版



SH-4・5・6 検出状況(南から)



SB-3 P-1・SH-1 検出状況 (北から)



SB-5全景(南東から)



SB-5 P-2 検出状況 (北から)



調査地から三上山を望む(西から)



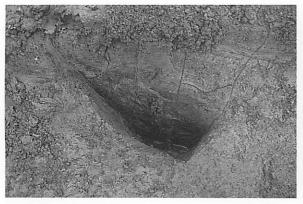
SB-5柱穴検出状況(北東から)



SB-5 P-2検出状況(南から)



SB-5 P-2断面状況(北から)



SB-5 Р-1断面(東から)



SB-5 Р-1全景(西から)



SB-5 Р-1全景(北から)



SB-5 P-1 (東から)



SB-5復元予想(北から)



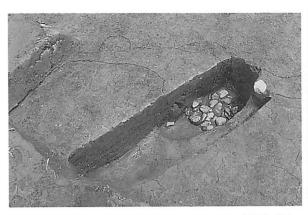
電探調査風景



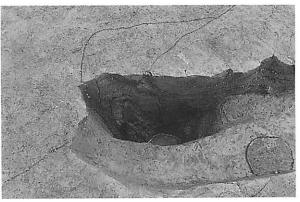
調査地全景(北東から)



SB-5全景(南東から)



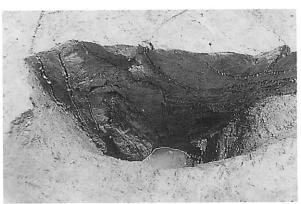
SB-5 P-3 (南から)



SB-5 P-4 (西から)



SB-5 P-4 (南から)



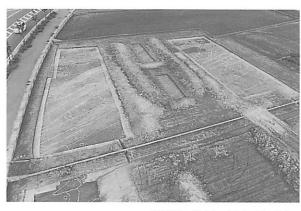
SB-5 P-4 (西から)



T-1・4 全景(北から)



T-1 SH-1・2 検出状況(北西から)



調査地全景(南西から)



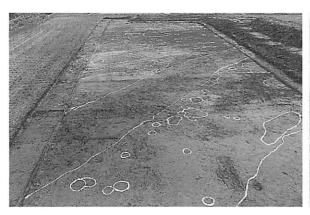
T-1・4全景(北西から)



T-4全景(西から)



T-1全景(西から)



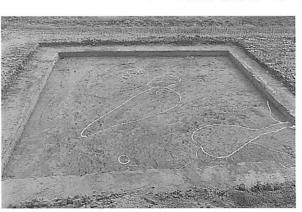
T-4全景(南西から)



T-2全景(南西から)



T-5全景(南から)



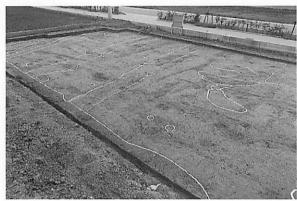
T-6全景(南西から)



T-1全景(南から)



T-1 SD-1~3検出状況(東から)



T-1全景(東から)



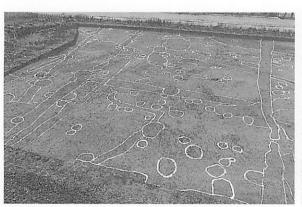
T-2全景(西から)



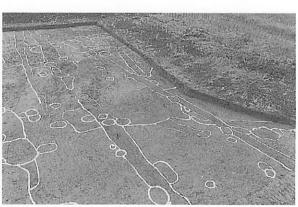
T-2全景(北から)



T-2全景(東から)



T-2遺構検出状況(東から)



T-2 SD-9検出状況(北西から)



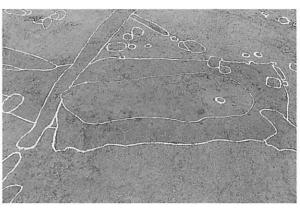
T-2 SD-9断面(西から)



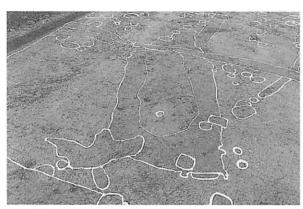
 $T-1 \cdot 2 \quad SD-1 \sim 4$



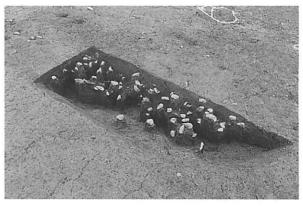
T-2 SK-1検出状況(南東から)



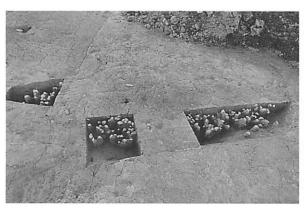
T-2 SK-1検出状況(西から)



T-2 SK-1全景(南から)



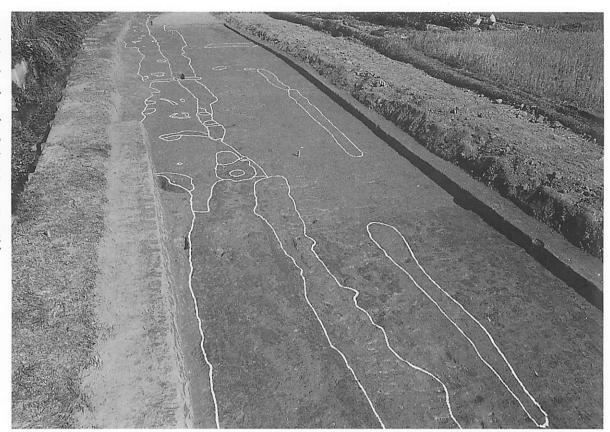
SK-1掘削状況(北東から)



T-2 SK-1掘削状況(南東から)



SK-1掘削状況(北から)



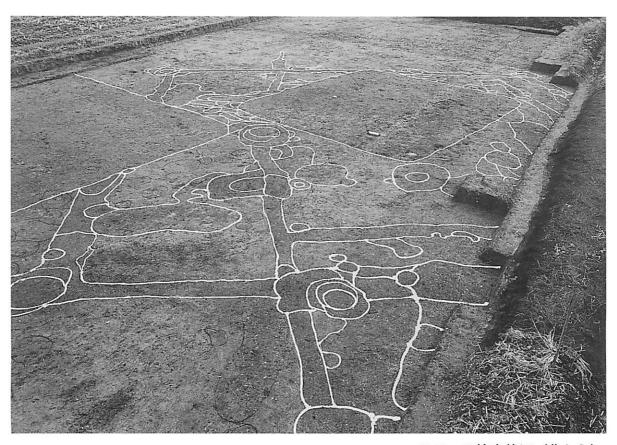
調査地全景(南西から)



調査地全景(北東から)



52・53次調査区全景(東から)



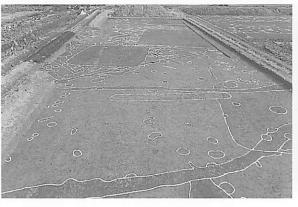
SB-10検出状況(北から)



調査地全景 (西から)



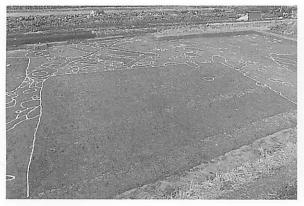
調査区全景(北東から)



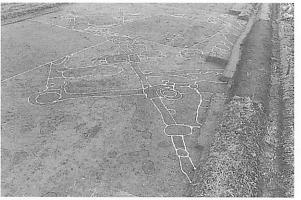
調査区全景(南西から)



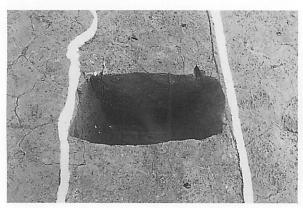
SB-10全景(南から)



SH-4 (南東から)



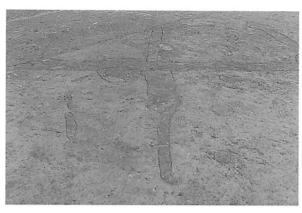
SB-10全景(北から)



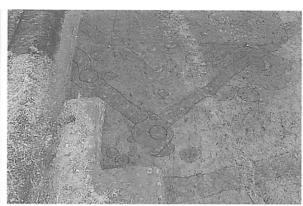
SB-10溝断面(西から)



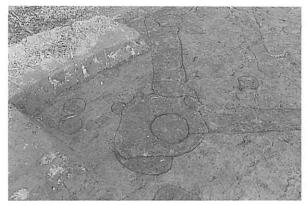
現地説明会風景



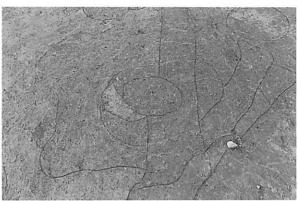
SB-10 下層溝(南から)



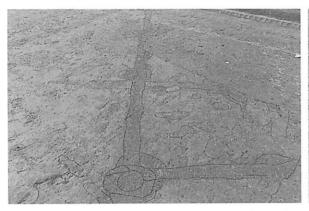
SB-10 P-4 (南西から)



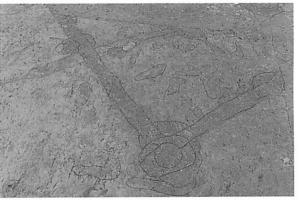
SB-10 P-4 (南から)



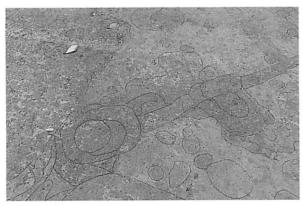
SB-10 P-3 (西から)



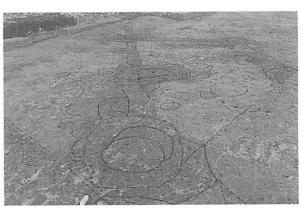
SB-10 P-1 (東から)



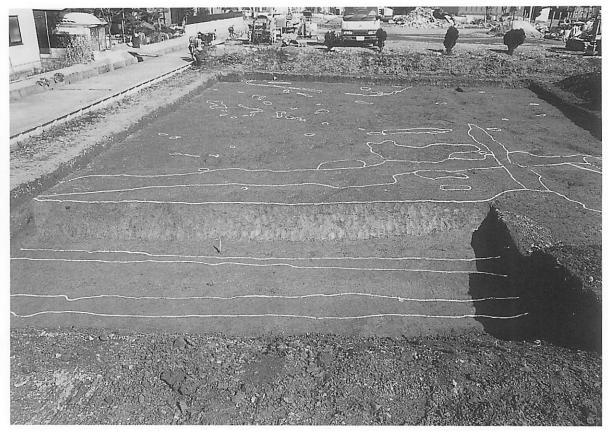
SB-10 P-1 (南東から)



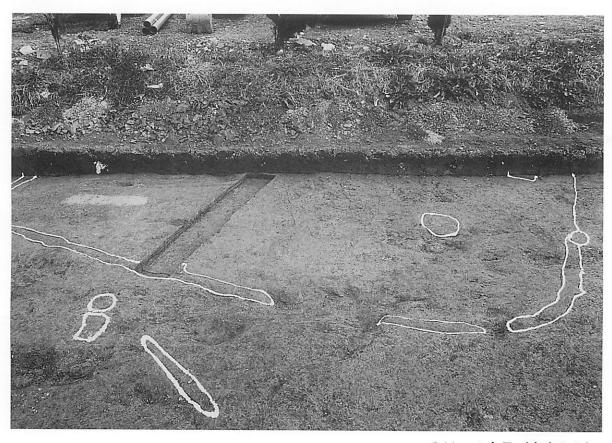
SB-10 下層遺構(北東から)



SB-10 下層遺構(南から)



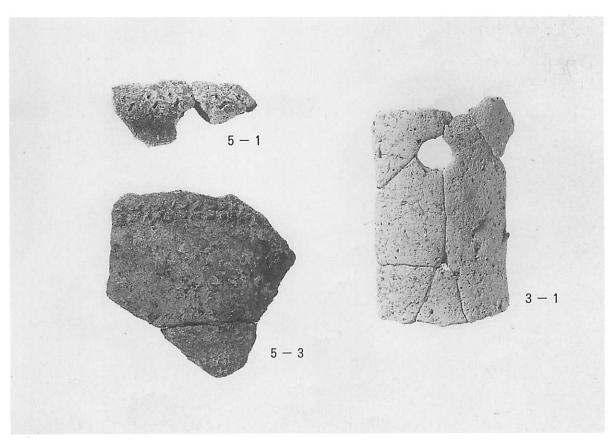
調査区全景(南東から)



SH-1全景(南東から)

図 版 一七 伊勢遺跡2次調査・大洲遺跡3・5次調査出土遺物写真





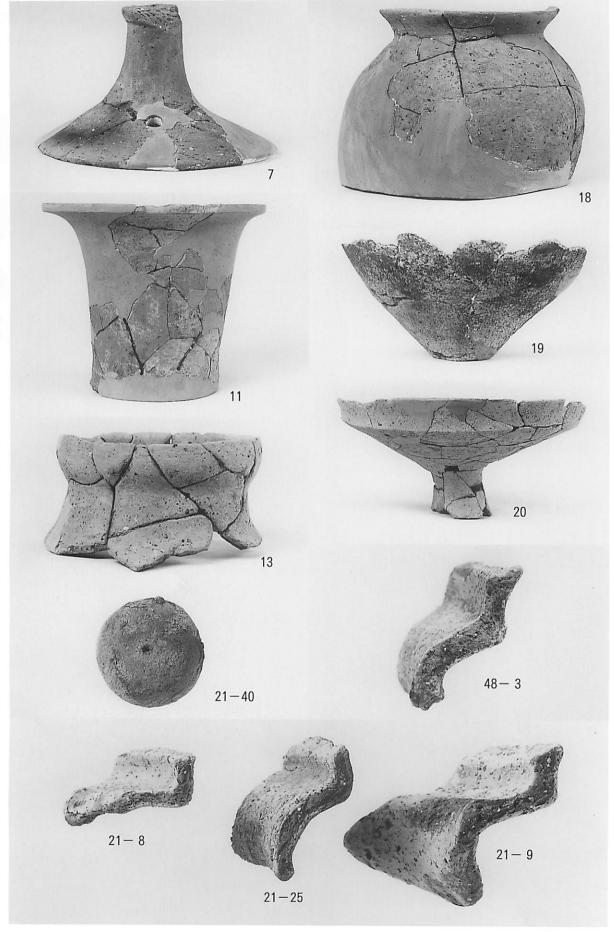
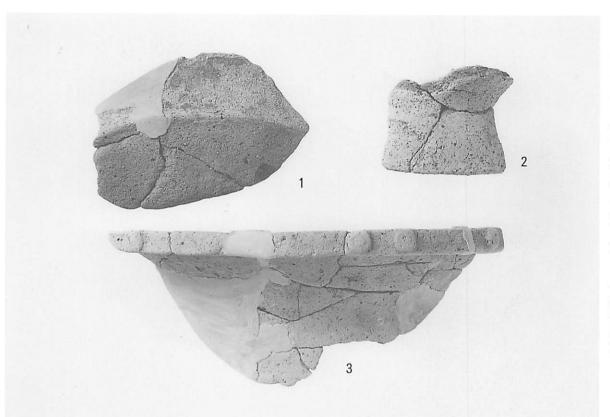
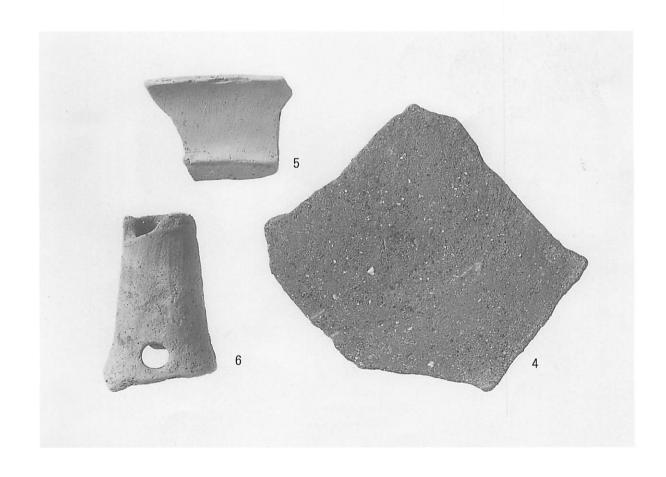
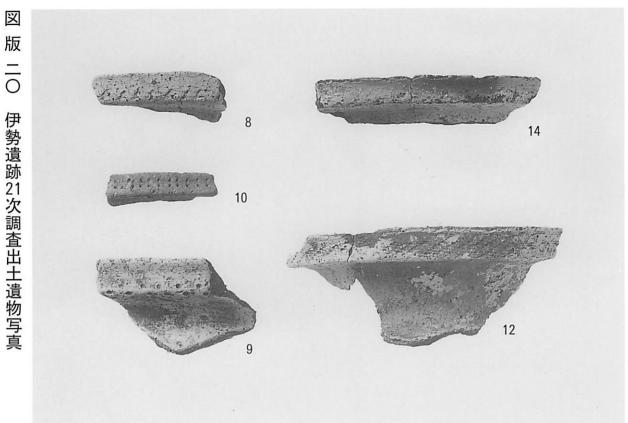
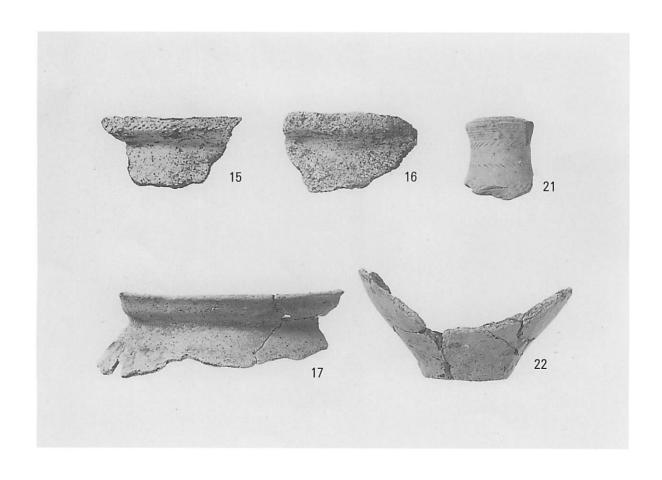


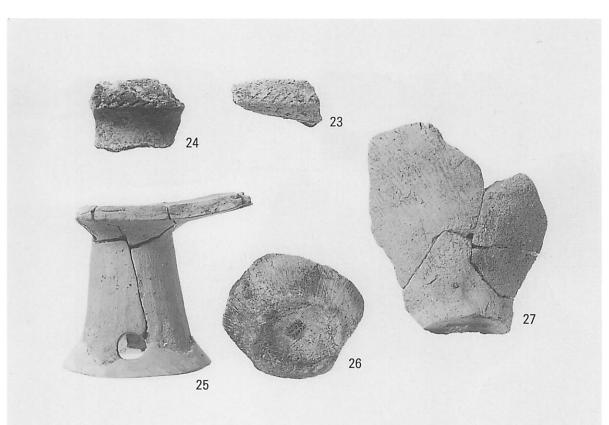
図 版 一九 伊勢遺跡21次調査出土遺物写真

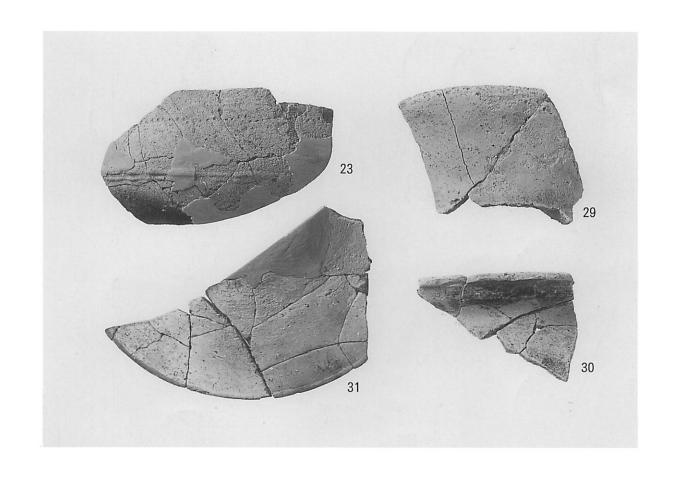


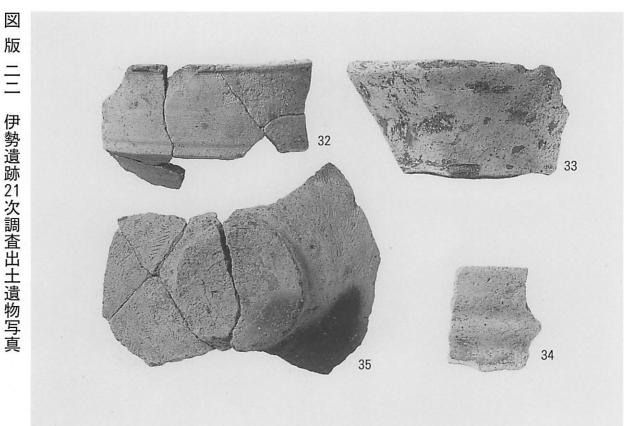












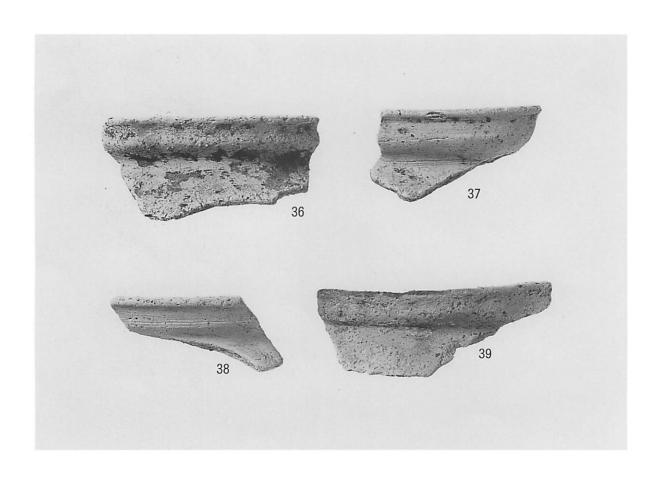
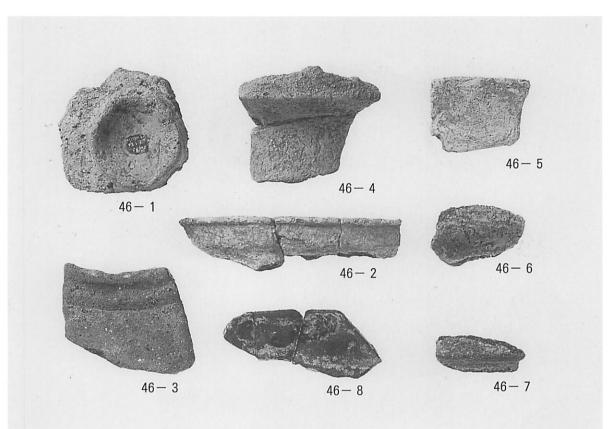
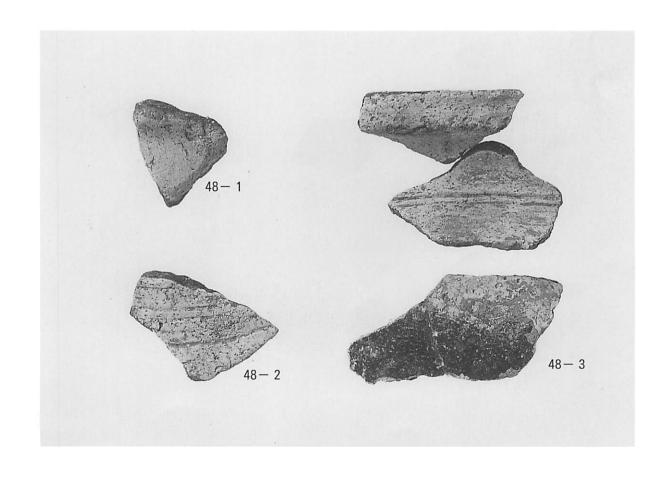
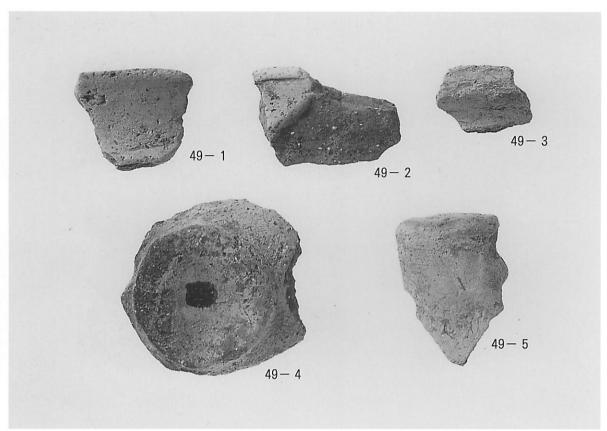
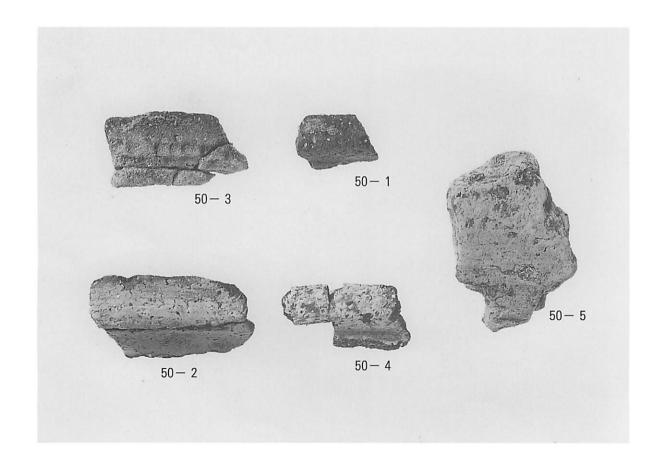


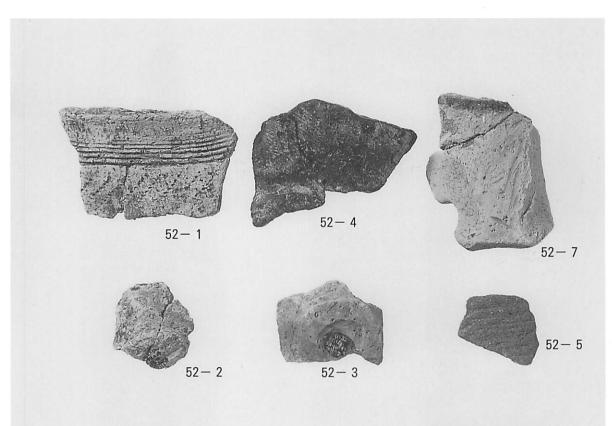
図 版 二三 伊勢遺跡4・4次調査出土遺物写真

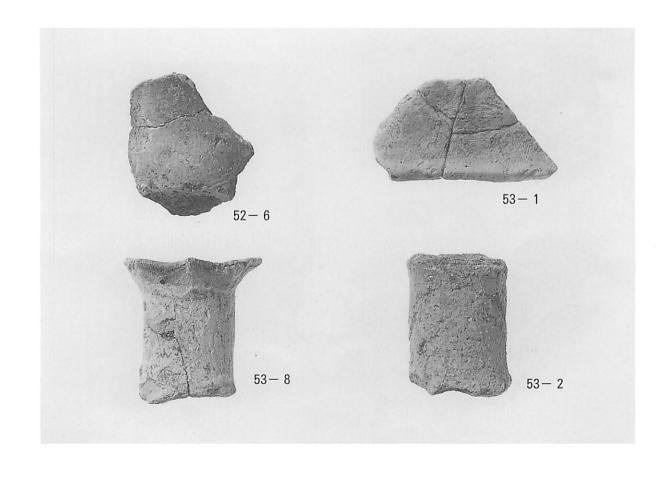












報告書妙録

<i>چ</i>	り 		か	な	いせいせきかくにんちょうさほうこくしょ												
書				名	伊勢遺跡確認調査報告書												
副	書 名				守山市文化財調査報告書												
編	著	:	者	名	守山市教育委員会 教育長 川 端 弘												
編	集	ļ.	機	関	守山市教育委員会												
所		在		地	〒524-8585 滋賀県守山市吉身二丁目 5 番22号 TEL077-583-2525												
発	行	年	月	日	平成15年 3 月												
\$	b		が	な	ふりがな]	· ˈ	1	 L #	幸	東	経	調査期間	調査	至面積	調査原因	
所	収	遗	跡	名	所 在 地	市町村	調査番号	査。		"	0 , 4			1			
一	**************************************	tsss			はずいらのでは、して 変に、 変に、 変に、 のでは、 の	25207		35	2		135	52	平成10年 1月~ 平成11年 3月	2,	500	確認調查	
所	収	遺	跡	名	種別主な時代			主な遺構				主な遺物		特記事項			
伊	勢	j		跡	集落	弥 生	時	代	大大	型 型	建建	付物 物 居 穴	弥 生 土	器			

伊勢遺跡確認調查報告書 守山市文化財調查報告書

発 行 日 平成15年 (2003) 3月

編集•発行 守山市教育委員会

滋賀県守山市吉身二丁目5番22号

印 刷 株式会社 スマイ印刷工業